


女子美

No.167/2010

- 
- 2P ポルトガル現代美術展開催
 - 6P 創立110周年記念式典・展覧会・イベント
 - 8P 卒業生 海老原嘉子氏講演会
 - 9P 「女子美に集まって、四月と十月の話をします」他
 - 10P 「女子美キャリア・カーニバル2010」レポート
 - 14P 先生のお仕事を覗く② 河邑 厚徳 教授
 - 15P 成田空港駅に佐野ゆい学長・吉武研司教授の作品 他
 - 16P 留学生交流会を両キャンパスで開催
 - 17P 女子美生による新しい仏壇の提案 他
 - 18P 六興電気の新ユニフォームをデザイン開発 他
 - 19P 女子美アートミュージアム展覧会情報
 - 20P アール・ブリュットについて 野見山院治×入江観対談
 - 21P メディアアート学科学生 杉並区議会ポスター制作 他
 - 22P 林規章教授 ADC賞を受賞 他
 - 23P 表紙の作家紹介 ー大小島 真木さんー

ポルトガル現代美術展

「the age of micro voyages—極小航海時代—」開催



オープニング・パーティの様子
左からポルトガル大使ジョアン・ペドロ・ザナッティ、ジョアン・タバラ、ミゲール・バルマ、マリアルジターノ

この夏、相模原キャンパスの女子美アートミュージアム（JAM）では、本学の杉田敦教授の監修により、ポルトガル現代美術展が行われました。オープニング・レセプションには、ポルトガル大使や相模原市の副市長にもご参加いただきました。また、展覧会にともなって、レクチャーやトーク・イベントなども開催され、多くの方にご参加いただきました。杉田教授の展覧会をふり返ってみての感想と、それぞれのイベントの一部をご紹介します。

今回の展覧会はどのようなきっかけで企画されたのですか？

「ポルトガルを気に入って毎年通っているんですが、そこでさまざまな出会いがありました。この展覧会は、友人たちといつか一緒に何かできないかと話していたことがきっかけです。出品作家のジョアン・タバラは、リスボンのアルファマという街の出身です。アルファマは古くからある街で、リスボンの観光地として、多くの人が古きよき時代のイメージを期待して訪れます。ただ、ジョアンと話していた時に、アルファマにも現在がある、と言った彼の言葉が自分の中でずっと気になっていました。確かにイメージのポルトガルと現在のポルトガルは違います。大航海時代や南蛮文化とかカステラではないポルトガルがあることを伝えたかった。こうした問題意識はポルトガルに限ったことではありません。今を生きる私たちにとって普遍的なことではないでしょうか」

出展された作家はどのような方々ですか？

「今回の作家は、みんなインターナショナルに活躍している人たちです。マリア・ルジターノとペドロ・コスタは今年のサンパウロ・ビエンナーレに出展します。今回、映像展という形態をとったのは、ひとつには

海外からの作品輸送が、コスト的に難しいという理由からです。一方ポルトガルは、マヌエル・ド・オリベイラという映画監督に代表されるように、すぐれた映像作家を生み出してきました。そのためか、ポルトガルの多くのアーティストが、映像作品も手がけています。そこで映像に焦点を絞った展示にしたのです」



タバラ氏のレクチャーはいかがでしたか？

「ジョアンのレクチャーは、最初のイベントということもあって、少し緊張していたかもしれませんが。彼の作品のおもしろいところは、作品に自分自身が出演している、つまり、撮影者は別の人であるという点です。それでもその作品は彼がディレクションしているということで、彼の作品ということになる。そういう作品とアーティストの関係も、ぜひ考えてもらえたらと思っていました。彼は、緊張がほぐれた後はスタッフともすごく打ちとけていたので、何かワークショップみたいなこともお願いして、学生たちとコミュニケーションする機会をつくれればよかったと思います。今後の課題ですね」

建築家のアルヴェルト・シザについてのトーク・イベントについては？

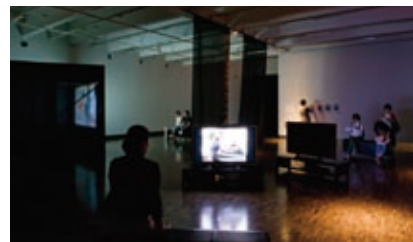
「今回、建築家としてだけではなく、アーティストとしてのシザの魅力についてもいろいろな視点で紹介できたと思います。モデルや女優をされている KIKI さんは武蔵野美術大学で建築を専攻していましたが、シザの建築をたどるように旅をしたらとアドヴァイスをしてくれました。彼女の言葉は、どんな理論よりも強く感じられました。それは単なる“感想”だと受け取られがちだけど、感想ほど強いものはない。シザの事務所で働いていた中村さんも、今回は技術的なことではなく、シザという人間やポルトガルでの思い出など“感想”を話してくれました。とっても楽しかったです」

映画監督のペドロ・コスタ氏のレクチャーはいかがでしたか？

「彼は、ここがフィルム・スクールでないことを踏まえてくれて、映画というメディアのことだけでなく、制作する姿勢について話してくれました。溝口や小津という日本の映画監督から、海外の人たちが本当に大きな刺激を受けているということも面白かった。彼の『ヴァンダの部屋』という映画は、女子美の図書館にも DVD があるので、ぜひ観てほしいですね。レクチャーの後に JAM で 1 時間ほどインタビューしたのですが、新作の『コロッサル・ユース』でロー・アングルを多用しているのは、主人公のヴェントゥーラが「山」だからと話をしてくれました。山というのは、ふつうは常になら下から見上げてるだろ、だからだと言うんです。刺激的でした」

展覧会を終えていかがですか？

「展覧会を企画し、カタログを制作し、イベントを行うという一連の活動を振り返って、誰よりも僕が学ぶことができました。また、オープニング・パーティも作品の一部と捉え、ポルトガルの料理やお酒を用意するなどスタッフといろいろ企画できたのも楽しかった。もちろん、そうした活動を出展者が喜んでくれたのも励みになりました。とりわけ展示空間は、すごくファンタスティックだと喜ばれました。僕たちの設計を実現してくれたタケダ株式会社さんには本当に感謝しています。またミゲール・バルマは“micro voyages”というタイトルを気に入ってくれて、自分の作品シリーズに使いたいと言っていました。学生たちには、字幕のない作品もあるなど、少し難しいかとも思いましたが、熱心に見てくれていました。来場してくれた方々にも感謝しています。今回の展覧会は、韓国に巡回したいという話も出ています。現在調整しているところですが、実現させたいですね。いずれにしても、この展覧会を通じて、現代美術経由で、いろいろと世界とつながるきっかけが生まれてくれるとうれしいですね」



女子美アートミュージアム展示室内の風景

■レクチャー アーティスト ジョアン・タバラ (2010年6月25日 相模原キャンパス)



自分の制作スタンスについて語るジョアン・タバラ氏

ジャーナリズムの経験を経て アーティストへ

私は学生時代に、美術大学で写真を勉強しました。3~4年勉強する中で、私の将来の仕事や、作品の関心はストレートな写真ではないと感じ、自分で哲学などの勉強をしました。卒業して、ジャーナリズムの仕事しながら、展覧会に出展するなどして、アーティストとしての活動を始めました。

仕事はフォト・リポートでしたが、ジャーナリストになろうとは思っていませんでした。けれども、経験した仕事は、ある意味で大きな学校でもありました。ニュースやテレビの現場で、実社会とつながりながら学ばせてもらったのです。実際に自分で取材に行くと、生の情報に触れることの重要性を痛感しました。ショッキングな経験も少なくなかったのですが、切り取られた写真や映像は、現実のほんの一部でしかないということ、あらためて知らされることになりました。

つまりそこで、イメージの危険性というものについて考えるようになったのです。イメージはとても危険なものでもあります。イメージや映像は、目の前にあると、ついつい本物だと思ってしまいます。戦争やさまざまな事件を直接見るという経験は、非常に大きな意味がありました。見ていると同時に、自分がいかに小さな人物かを感じさせられるのです。この経験は、その後の作品に大きな影響を与えたといえるでしょう。

表面だけを見てしまうことはとても危険で、そういう意味では、編集ということについて深く考えさせられました。世の中に無垢なものは何もありません。表面だけを見てはだめで、ある程度距離を持たなければなら

い。さもなければ、世界はすべてが同じようになってしまい、すべてに対して受身になってしまう危険性があるんです。

とにかく提案をしたいと思っている

作家として何ができるかということを見ると、新しいものをつくるということにはこだわっていないのかもしれませんが、新しいというのは発明に近いことで、アーティストは何かを発明しなければいけないということはないのです。何かを創り出すということは、発明とか新奇性とかオリジナリティなどではないのです。

20年以上制作をしてきました。何かをクリエイトしたいと思いつけてきたわけですが、まだそれを成し遂げることができたとは思っていません。でもそのことをポルトガルの哲学者に愚痴ったら、そんなに悩むことはないと言われてきました。アインシュタインでさえ、多くのことはやりかけだったというのです。ですから、常に創り出そうという努力を続けることこそが大切なのです。誰もやったことがないことをしなければならぬということではない。その意味では、私はとにかく提案をしたいと思っています。提案しないと、何かを感じることができなくなってしまう。人間の状況、経験、体験や、幸せの可能性を追求する。それが私の制作に向かう姿勢です。

そのとき、重要になるのが読書です。私は毎日最低2時間は読書をするようにしています。特に哲学です。哲学によって私の心が世界に開かれていく。そのときの世界は、国境のないユニヴァーサルな世界です。哲学という文脈をたどりながら、自分自身を歴史や世界に位置づけることができる。それが重要なのです。

これだけイメージが氾濫し、すべてが同じように見えてしまう世界の中で、どうしたら批判とか考察することが可能になるのでしょうか。そういうことを可能にする場を、どこに見出せるかということ。私は、写真とか哲学、映画、美術、音楽といったものこそが、そういう場ではないかと思えます。



"Roda" 2007 @João Tabarra

時間をかけて作品を見る大切さ

私は、ユーモアとかピカレスクという誇張的な表現を用います。最初はみんな笑って見っていますが、注意深く見ていくと変わってくる。シンボルとかアイコンも多用しますが、それらは見た目はシンプルですが、じっくり見ていくと変化が起こる。アートは、もっと時間をかけてゆっくりと見るものだと思います。今日の芸術作品はファスト・フードみたいになってしまっていますが、アートというのは人生のマラソンみたいなもの。じっくり時間をかけて体験してほしいと思います。

ユーモアとかアイコンを用いるのは、それらによって象徴される歴史の重さを、すこし軽くできるのではないかと考えているからです。作品は、一見するとシンプルで明確、複雑なものは何もないように見えるけれども、実は複雑なんです。難しいというわけではありません。これは時間をかけて作品と対峙する人が、深く掘り下げていくことで、ゆっくりと理解していくことができるものではないでしょうか。

私は、画像とかイメージに対して、逆説的にアプローチしています。作品の中に自分が入り込むと同時に、距離を保つのです。距離を保つことができなければ、作品に対して批判をしたり、もう一度見たり考えたりすることができなくなってしまう。完全に入り込んでしまうと受身になってしまうのです。

アートというのは人間の経験から生まれるものです。それぞれの作品は、複雑性と豊かさを持っています。みなさん一人ひとりが作品を見て、自分のナラティブ(物語)をつくってもらえたらと思います。

ジョアン・タバラ / João Tabarra

1966年リスボン生まれ。アーティスト。ステレオタイプなポルトガル像が無批判に再生産されていることに対する批判をはじめとして、現代社会の根底に潜む葛藤や問題を、独自の視点で告発する。もちろんそれは、ポルトガルのみならず、あらゆる権力、制度、暴力やシステムへの疑義としての意味も秘めている。

■トーク・イベント “アルヴァロ・シザ：ポルトガルの現代建築”

中村光則 × KIKI(キキ) × 杉田敦 (2010年7月10日 相模原キャンパス)



聖マリア教会のミサの様子を見たあと3人のトークは始まった

杉田：中村さんには、8年前シザの展覧会を開くときに、いろいろとお世話になりました。キキさんは、旅雑誌のポルトガル特集号でシザの建築を訪ねて歩かれています。とてもナチュラルな感覚の言葉で彼の建築の魅力を伝えていて、印象に残っています。

中村：私は1999年～2003年の4年間、シザ事務所で働いていました。アルヴァロ・シザは日本ではまだ情報を得づらい建築家です。私は建築的な視点からになってしまいかもしれませんが、みなさんにわかりやすくお伝えしたいと思います。

キキ：私は、武蔵野美術大学で建築を勉強し、エッセイを書く機会をいただいたりしたのですが、今はまささらな状態で建築を見ています。建築の知識があってもなくても、それぞれ個人の見方があると思うので、今日は私の見方で感じたことをお伝えしたいと思います。

杉田：聖マリア教会のミサと、ミサが終わった時の映像を見てください。

中村：シザの代表的な建築です。外から見ると四角なのですが、中の空間は湾曲した空間。とても魅力的な空間になっています。この教会は幅広い空間の使い方ができるので、演劇などもやっていて、村の人たちが愛着をもって利用しています。

キキ：コルビジェのロンシャンの教会とは違って、地元根付いている感じですね。すごく衝撃的でした。

中村：シザは教会と小教区と住宅を見据えた計画を立てていました。寄付を募ってまず教会をつくりました。とても愛されている建物です。神の宿る教会なので愛されるのは当たり前ですが、それ以上に建築に携わる人や芸術家にも刺激を与えている。訪れる人が後を絶たない場所になっています。

キキ：あらためて見ると、シザは、白と光の使い方が素晴らしいと思います。

中村：シザは、自分では光に関して手法として意識しているとは言わないけれど、私

は光を意識していると思っています。あらためて、すごく明るいなと思います。

杉田：僕も何回か行ってますが、後ろの大きな扉が開いているとまぶしいくらい。

中村：明らかに、光について考えている。

キキ：でも、狙った感じがしない。あたりまえにあるものを、あたりまえに使うところが、シザの建築の特徴だと思う。

中村：ツールとしての光を使う建築家は多いけれど、シザの場合はそこにあってあたりまえの使い方をしてしています。

キキ：シザの建築はまた行きたくなる。最近よく山に行くのですが、同じ場所にリピートして行きたくなります。建築も、そういうものとそうじゃないものがある。

中村：シザの建築は喜びを感じさせてくれます。ぜひ見に行ってください。写真には写らないものがたくさんあります。

キキ：シザの建築はすばらしいのに、誰かが取り入れて成功した例がないと思います。真似すればいいのに、真似できないのかも知れないですね。

中村：若手の人が真似しようとするけれど、難しいですね。ポルト大学では多くの学生がシザを意識した模型をつくっていますが、違うものになってしまう。一緒に仕事をしていると、私たちが1～2ヶ月かけて悩んでいることを、彼がスケッチにとりかかると、5分が10分でやってしまう。そういう力を持っている。でも、それを感じさせない人柄がまた魅力的です。

杉田：いろんなことを考えているんでしょうね。ドローイング展をやるために打ち合わせをした時に、いろんなメモとか端切れにいろいろ描いていました。膨大な量があって、その背後には全部建築のイメージがあって、どれにでも応用できる。ものすごいストックだと思います。

中村：彼は旅を重要だと言っていましたね。旅から帰るとものすごく影響を受けて仕事にも反映されていました。才能もあるけど、引き出しもいっぱいあるし、建築に関することは鉛筆の一本でもよく見えます。勤勉、努力家ですね。また、歴史に関してはものすごく気を使う人です。今、葉山でプロジェクトをやっていますが、彼が日本の歴史や文化をどう捉えるのか、どんな風になるのかわくわくしますね。

キキ：日本の葉山がシザの建築とどんな風に絡み合うのか、楽しみです。でもポルトガルにもぜひ行っていただきたい。時代的

なこともあって、シザはポルトガル国内で多くの仕事をしていて、海外に出て行くのが遅かったのが良かったと思います。本当にシザの建築を巡るだけで、旅ができるのです。日本とポルトガルって、東の端っこと西の端で、まったく違うのですが、なんだか共通するものがあるなって感じます。

杉田：僕もポルトガルが大好きで、よく行くんですけど、でも何に惹かれているの明確にはわからない。完全に異質ではないんだけど、大切なところの価値観がちょっとずれている。それが、僕らにとって、完全に忘れられていたものをもう一回思い出させてくれる。例えば、パウルなんかに行くと、本当に老若男女集まって話していて、それがとても新鮮だったりする。

中村：私もそれを感じました。大学で、日本は路地の文化、欧州は広場の文化と教わりましたが、ポルトガルには広場はあまりなくて、路地の文化なのです。窓辺におばちゃんがいる、立ち話のはじまっちゃうような、そういう部分で日本と共通する部分が多いと思いますね。

キキ：その地に足を運んで見に行く大事さを感じました。写真だったり、映像だったり、いろんな表現の仕方があって、その表現に合ったものとか、表現しきれないものとか、実際に組み合わせてみないとわからないものとかあって、その辺の表現の仕方を追求したら面白いんだろうなって、ちょっと別の発見がありました。ありがとうございました。



左から中村光則さん、KIKIさん、杉田敦教授

中村光則 / Mitsunori Nakamura

1971年生まれ。ドイツ、日本、アメリカの三カ国にて幼少期を過ごす。1990～92年 カルフォルニア大学サンタクルーズ校。1997年 東北大学工学部建築学科卒業。1999～2003年 アルヴァロ・シザ・アルキテクト 所員。2010年現在 伊藤邦明都市建築研究所 所員。2007年「アルヴァロ・シザの建築」展 ギャラリー・トークイベント「アルヴァロ・シザの建築手法」話し手として参加。

KIKI (キキ)

1978年生まれ。モデル。2000年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。在学中からモデル活動を開始。卒業後は空間プロデューサー・山本コテツ氏のもとで働く。2002年にナウファッションエージェンシーに所属してからはモデルに専念。雑誌やTV/CMなどの広告モデル。連載などの執筆。著書に『LOVE ARCHITECTURE』(TOTO出版)。出演映画に『ヴィタール』(塚本晋也監督作品)。

■レクチャー 映画監督 ペドロ・コスタ (2010年7月31日 相模原キャンパス)



ペドロ・コスタ氏には映画制作、芸術表現について語ってもらった

人間や歴史に対する愛情を映画と組み合わせる

みなさんは、美術大学で自己をどのように芸術的に表現しようか、ということについて学んでいると思います。私自身は自分のことを映画界の囚人と言っています。狭いシネマ、閉鎖的な映画という世界で生きています。いつも感じていることですが、私は、芸術家としては、古いかたちの表現に取り組んでいるんです。

10代の頃をふり返ってみましょう。大学では中世の西洋史を専攻しました。もしかすると研究者の道を目指していたかもしれない。中世のさまざまな遺跡、教会、寺院、家、そして石といったものを深く見つめていました。歴史の勉強だけでは物足りなかったので、大学時代は映画をたくさん見ました。その時に感じたのですが、過去・人間・歴史に対する愛情や愛着を、映画という芸術的な方法と組み合わせたら、すばらしいものになるのではないかと考えています。

今、『ヴァンダの部屋』という映画を見てもらいましたが、主人公の生活は中世の頃とあまり変化がないのではないかなと感じます。私たちの生活、生き方、人生の選択肢というのは、昔と変わらず、非常に古いやり方でやっているのではないのでしょうか。

この映像は、ギャラリーや美術館で展示するには、欠けているものがあると思います。その理由は、この映像には特に意図がないからです。芸術的な、象徴的な性質を帯びているものではなく、単に記録をしようと考えたものなのです。制作しようと思ったときに、特定の意図がまったくなかった。恣意的な現

代アートとは違って、そんなところが、私が映画を好きな理由なのかもしれません。

そこにあるものをしっかり見ていく

私は、このような自由で、恣意的な意図のまったくない、ある意味で顔のないアートの表現を続けていきたいと思っています。もちろん、そうはいつでも、映像を撮影する際に、構図や構成、光などをまったく考慮していないというわけではありません。もちろん、考慮するわけですが、でもそれは、私たちが作品をつくるうえでの作業の結果だと思っています。

芸術性というものは、生まれもってあるインスピレーション、能力、もしくはそういった啓示が、空から舞い降りて、ある日突然、生み出されるというものではありません。視覚的なもの、聴覚的なものはすべて、感覚によって実現できるものだと考えています。

私にとって芸術とは、現実世界と密接している映像世界です。カメラを回すということは、そこにあるものが映るということです。そこにあるものをしっかり見ていくことが大切なのです。多くの芸術家は現実ではなく、自分自身と向き合っています。私は、自分自身ではなく、何かと向き合うことが大切だと思っています。とりわけ、現実と向き合おうと心がけています。今日の映像作品の多くは、ナルシスト的な思考が主流になっていて、映像が本来持っている社会を批判することができるような、現実を映し出す力を失っているように思います。3Dなどの表面的なカモフラージュやイメージ、音楽が悪用されているのです。映像は単に映像でしかない。考え方ではない。つまり、カメラで思想は表現できないのです。

私の考えや思想は、存在しているものの中にあります。目の前に存在しているものの中にあるのです。そのために制作する。そうでなければいけないと考えています。制作の結果は芸術的なものではありません。芸術をつくるのではなく、制作することが大切なのです。例えばセザンヌには恣意的な意図はない。芸術的なものをつくらうとはしていなかった。そこが重要なのです。

Q：作品はフィルムで撮っているのですか？

A：私は、パナソニックのカメラを使っています。フィルムでもデジタルでも、大差はありません。最も重要なことというのは私のカメラに対する敬意です。カメラを本当に大切に扱っています。カメラに目の前にある芸術



JAMでの展示風景
"Tarrafal" 2007 @ Pedro Costa

を撮ってもらっている。フィルムかフィルムでないかは重要ではありません。

Q：見えない現実をどうして取り上げるのですか？

A：私は、作品や人物を選んだわけではなく、一步一步、自分が望んだところにたどり着くまで、20年間かかったのです。それだけの時間をかけて、自分が望むものを見つけたのです。まるで導かれたかのように、その人と出会い、そこにとどまろうと決めたのです。私は単にそこにいて、本当に普通の暮らしをしながら、毎日、記録をしたのです。現実はどうたどり着くかは、そんなに特別なことではないと思います。芸術は特別なことではない。自分自身を現実の世界においておけば、それだけで可能なのです。重要なのは、自分自身を選ぶのか、現実世界に生きるのか、という選択だと思います。

Q：現実世界ではなく、自分の感情を絵にしたいということもあると思いますか？

A：もっとあなたやあなたの作品を知らなければ、うまく答えられません。そもそも、こういうことを理論として説明することはできないと思います。大事にしてほしいのは、自分自身の感情に向き合うことです。それは毎日の生活です。セザンヌは本当に目の前の現実世界に身をおいていた作家です。アーティストは自分のちっぽけな脳みそをキャンパスに描くのではない。太陽とか、光とか、この世から消えていくものを毎秒毎秒感じながら表現するのではないのでしょうか。

ペドロ・コスタ / Pedro Costa

1959年リスボン生まれ。映画監督。ポルトガルを拠点に活動中。1989年にヴェネチア国際映画祭で最初の長編映画『血』がプレミア上映され注目を集める。最新作『何も変えてはならない』は2009年カンヌ国際映画祭：Quinzaine des Réalisateurs (監督週間)にて上映。また近年では世界中のギャラリーや美術館などで展示を行っている。

Notice ● ● ● 創立110周年記念式典・展覧会・イベントのお知らせ

本学は今年、創立110周年を迎えました。創立110周年記念事業として昨年から来年にかけて様々な記念事業を行っておりますので、ご紹介します。

※企画内容、出演者については変更する場合があります。

記念式典

創立110周年を記念した式典を執り行います。

【日時】2010年11月3日(水・祝)

13時30分～16時

【会場】朝日ホール(有楽町マリオン11階)

記念イベント

○「三岸節子没後10年」記念シンポジウム

本学を代表する卒業生三岸節子画伯の没後10年にあたり、その時代背景と絵画を結びつける内容をテーマとしたシンポジウムを開催し、その偉大な業績を振り返りながら、本学の人材の厚みを若い世代に伝えていきます。

【日時】2010年10月24日(日)

15時～16時30分

【場所】相模原キャンパス224番教室

【出演者(候補者)】

○ゲスト

三岸太郎(三岸節子画伯の孫・高輪画廊代表取締役)

○司会・コーディネーター

東真理子(朝日新聞社文化事業部企画委員)

○パネリスト

野見山暁治(洋画家・東京藝術大学名誉教授・文化功労者)

土方明司(平塚市美術館館長代理)

佐野ぬい(女子美術大学・女子美術大学短期大学部学長)

○何でも鑑定団 in 女子美

テレビ東京で16年間続いている長寿番組である「開運!なんでも鑑定団」の出張鑑定を、創立110周年記念行事として本学主催で杉並キャンパスにおいて実施します。

【日時】2010年12月19日(日)

【場所】杉並キャンパス 新体育館

(観覧は申し込み制)



○110周年記念事業シンポジウム

『現代アジアの女性作家』および出版

110周年記念事業の一環として、国際的なシンポジウムを開催するとともに学術書籍『現代アジア女性作家』を出版します。

【日時】2010年11月4日(木)

13時20分～16時50分

【場所】相模原キャンパス 1312教室

○基調講演 北澤憲昭教授「植民地表象とリアリズム」

○シンポジスト

楽正維氏(中国 何香凝美術館副館長)

「中国の現代女流作家について」

黄光男氏(台湾 台湾芸術大学学長)

「台湾の現代女流作家について」

金恵信氏(学習院大学非常勤講師)

「韓国現代美術の女性作家達」

小勝禮子氏(栃木県立美術館学芸課長)

「現代日本の女性アーティスト」(仮題)

○同窓会企画

マール・セルベット氏講演会「ショパン生誕200年：音楽・ムゼオ・建築デザイン」

2010年3月にオープンした、ショパン・ミュージアム(ポーランド・ワルシャワ)を設計した(イタリア建築家、本学客員教授)マール・セルベット氏は国際コンペに最優秀賞で入賞しました。天才ショパンの音楽・アートとのコミュニケーションについての講演会を女子美術大学同窓会が開催します。

【日時】2010年12月11日(土) 14時～

【場所】東京大学構内 福武ホール

○『女子美青春アーカイブ』、『女子美トリビア』(月刊美術)連載

本学の現在活躍するアーティスト10名を2010年1月号から10回にわたって紹介しています。11月号では、女子美術大学創立110周年巻頭特集を組みます。

○『二つの星』(美術の窓)連載・単行本化

美術の窓に『二つの星』横井玉子と佐藤志津 女子美術大学建学への道(山崎光夫著)を2009年6月号から2010年9月号までの16回にわたり連載しています。連載終了後は、講談社エディトリアルにおいて単行本化、首都圏の書店に配本し、書店販売も行います。

○110周年記念 テキスタイルアートによるパフォーマンス

短大テキスタイルデザインの学生達により長い歴史の中で成長しつづけている大学への熱い思いを、素材のアートと身体表現で社会に向けて発信していきます。そして、先輩から後輩へ女子美生のメッセージを伝えていきます。

【会期】2010年10月28日(木)

18時開演 予定

【場所】恵比寿「イーストギャラリー B1ホール」(渋谷区東3-24-7ライビル)



○記念ワインプロジェクト

長野県高山村、須高ケーブルテレビ、女子美術大学の産学官連携事業「信州高山村プロジェクト」において、本学学生70名による白ワインぶどう(シャルドネ)約1トンの収穫作業を行い、飯綱町のワイナリー(サンクゼール)において、ワインの仕込みを行いました。そのうち110本を「女子美110周年記念ワイン」というラベルでデザインいたします。



列伝出版

○「女子美術教育と日本の近代—女子美110年の人物史」

110周年記念事業実施本部の下部組織である歴史資料充実・110周年史編纂部による出版企画。

女子美110年の歴史をさかのぼり、創立した1900年を中心に本学の教育に関わった人々を紹介します。

記念展覧会

○日本画をまなぶ一女子美術学校における日本画教育

1900年に創立した本学は、開校時より一貫して日本画教育を行ってきました。5月から6月にかけておこなった本展覧会では開校から戦前までの日本画科の教員・卒業生の作品を紹介しました。

○何香凝 芸術名作展 女子美術学校卒業100年記念

本学の前身である私立女子美術学校の卒業生で、中国では画家・政治家として極めて著名な何香凝（かこうぎょう、1878-1972）の画業を紹介する展覧会です。なお、本展覧会は上野の森美術館（2010年11月6日-11月12日）で開催後、本学美術館に巡回します

【会期】2010年11月19日（金）
～12月5日（日）

【場所】女子美アートミュージアム

○女子美術大学創立110周年記念展「Resistance & Obedience —女子美110年、美の指導者たち—」

現在の教員と過去の教員の作品展です。昨年、ヴェネツィア・ヴィエンナーレで日本館展示のキュレーションをつとめた本学の南高宏教授がキュレーションを手がけます。

【会期】2010年12月23日（木・祝）
～12月27日（月）

【場所】上野の森美術館

「江戸 KIMONO あーと」展（仮称）

女子美染織コレクションから江戸時代後期の着物を中心にした展示を行います。2011年3月より京都、大阪、日本橋、横浜の高島屋を巡回し、2011年11月には女子美アートミュージアムで開催します。NHKの各地の放送局が主催で、本学が特別協力をおこないます。

詳細はウェブサイトをご覧ください。

<http://www.joshibi110th.net/event/>



○「パリで暮らす、つくる。—創立110周年記念展 女子美パリ賞+α—」

パリ賞は「100周年記念大村文子基金」により創設した賞で、国際的なアーティスト・研究者の育成を目的に、大学院生および本学の卒業生の応募者の中から公募し、毎年一名をパリにある国際芸術都市に研究員として派遣しています。本展では第1回～10回の受賞者10名のアーティストを紹介します。

【会期】2010年9月17日（金）
～10月24日（日）

【場所】女子美アートミュージアム



野村 千夏「くつがない…」



いしばしめぐみ「よこしま」

○八咫鏡の女流作家展

2007年に本学の大村智理事長が設立し、蕪崎市（山梨県）に寄贈した「蕪崎大村美術館」において、本学の110周年を記念して開催される展覧会です。文化勲章受章者の片岡球子や大久保婦久子の作品をはじめとする本学卒業生の著名な18名の女流画家たちの作品が一堂に会します。

【会期】2010年10月17日（日）
～2011年2月27日（日）

【場所】蕪崎大村美術館（山梨県蕪崎市）



郷倉和子「晨々白梅」

○同窓会企画展「予期せざる出発」

女子美の110周年を記念して、女子美術大学同窓会が企画展を実施します。展示作品は公募によるものです。「予期せざる出発」をテーマとして女子美の卒業生と在学学生から作品を公募し、入選したものを展示いたします。キュレーションは本学卒業生でキュレーターの真子みほさんによるものです。

【会期】2010年10月29日（金）
～11月10日（水）

【場所】有楽町朝日ギャラリー（有楽町マリオン11階）



○佐野ぬい展

佐野ぬい学長の巡回展を全国の高島屋で行います。

【会期】

（日本橋）

2010年10月6日（水）～10月12日（火）
（横浜）

2010年10月20日（水）～10月26日（火）
（大阪）

2010年11月10日（水）～11月16日（火）
（京都）

2010年11月24日（水）～11月30日（火）
（名古屋）

2010年12月22日（水）～12月31日（金）
（中国・何香凝美術館）

2011年2月20日（日）～3月20日（日）



射手座の音

Lecture ● 1 卒業生 海老原嘉子氏講演会 アートとデザインの国際市場への道～NYから見える日本～

5月29日、相模原キャンパス224教室にて、本学卒業生の海老原嘉子氏の講演会が行われました。海老原氏は1983年にNYのソーホーでデザイン専門のギャラリー「Gallery91」をオープンして以来、ユニークな視点でディレクター・キュレーターとして活躍。国際的なデザイン・コーディネーターとしても常に注目を集めてきました。この講演会は、現在のNYのデザイン状況やNYから見た日本のデザインについて、画像や実例の紹介とともにお話いただきました。ここに、講演会の一部をご紹介します。

価値観・意識・生活の違い

NYでは日常のいろんなシーンからデザインやアートが生まれています。中でも話題になっているのがミートパッキングエリア。もともとここは商業貨物列車の線路が集まる場所でした。使われなくなった線路の高架線があるこのエリアは薄暗く、物騒だったため、この高架線を取り壊そうという話に。これに多くのアーティスト、建築家、デザイナーが猛反対をしました。この地の工業の歴史の象徴であるこの高架線を残したいという「Friend of High Line」という組織ができ、この高架線再生のための建築コンペが行われ、そしてプロジェクト始動から10年たった2009年、高架線の原形を生かした新しい公園に生まれ変わりました。公園には家族連れが集まり、以前の物騒な雰囲気から大きく変わりました。周辺にはホテルやコンドミニアム、大きなビルができて新たなビジネスのチャンスが生まれています。

私のギャラリーがあるNYのソーホーでは、毎日のようにパーティがあります。日本であればデパートとかホテルの宴会場でパーティをするかもしれませんが、NYでは自分のお店の前の通りをパーティ会場にしてしまいます。突然パーティが始まって、一晩中みんなで大騒ぎするんです。パーティでは、食事やアクセサリ、ファッ



ションなど、気になったものは絶対に「誰のデザインですか」という話をします。日本ではあまりこのような話はしませんよね。

NYアートマーケットの構造と国際マインド

日本ではアーティストがお金を払って貸しスペースで個展をやりますが、ディーラーでありキュレーターという立場で仕事をしている私から見ると、このようなやり方はもったいないお金の使い方をして、届かないところで展覧会をしている感じがします。NYのアーティストは、基本的に自分たちがお金を出すのではなく、各ギャラリーに自分の作品を認めてもらい、ギャラリーからのサポートを受けています。彼らが有名になって、最終的に目指すのはミュージアムであり、オークションハウスというところ。日本ではまだなかなかこのような仕組みが確立できていませんから、自分がアーティストとしてではなくて、マネジメントをやろうとか、プロデューサーになろうとか、間に入ってアーティストを世界に羽ばたかせたいというような人が女子美生の中から出てきてほしいと思っています。

最近の日本のデザイン自体は、非常にいいと思います。ただ、未だに国際マインドが浸透していないことが問題です。たとえば、クリスマスカードのデザインに「メリークリスマス」と書いてしまうこと。「メリークリスマス」はクリスチャンしか使いませんので、NYの80%の人はユダヤ教など宗教が別なので、このカードを使うことができません。また、桐箱に入った高級なお酒も、大量に使うレストランでは箱は必要ありませんし、それを捨てるのに費用がかかる。コストに対しては特にシビアです。NYでは環境問題にも高い関心があります。日本の素晴らしいパッケージはいいんですが、過剰パッケージは通用しません。商品の付加価値は消費者が選択するもので、押しつけはちょっと考えものです。

Gallery91

私がNYのソーホーでデザインギャラリー「Gallery91」を始めたのは1983年。その年、日本のレストランのディスプレイで使われる本物そっくりの食品サンプルを使った「目で食べる食品 生活アート展」を行いました。みんな面白がるだろうと



思って招待状の中に食品サンプルの米粒を入れました。というのも、学生時代に受けたギャラリーマネジメントの授業で、「招待状を受け取ってもまず開けないだろう。開けたとしても20回電話をしなければ興味をもたないだろう」と教わったので、「20回も同じ人に電話するのは抵抗がある。どうしても招待状を開けさせて、興味をもってもらわなければ」と思ったのです。米粒を入れた招待状はカサカサ音がするわけです。受け取った人は何だろうと思って開けたそうです。当時、日本のものを見せると「テレビのマネっこ」と言われる時代に、ニューヨークタイムズとニューヨークマガジンの両方が、そしてテレビ局が3社きました。

私がキュレーションするのに必要な情報をどうやって手に入れるかというと、人脈をもつことです。たとえば、1日に3つのギャラリーのオープニングパーティが重なったとしても、大事だと思ったら私は全部に顔を出します。もちろん作品を見たり、作家に会うことは大事。だけどそういうところには雑誌の記者、ミュージアムのキュレーター、作家と絶対に話をしたいといういろんな専門家たちが来ます。その人たちにアポイントをとって話をするのはとても難しいけれど、そこで言葉を交わすことで多くの情報を得ることができます。そういう積み重ねです。

私のこれまでの経験から皆さんに伝えたいことは、学生だから許されることがあるということ。学生だったら有名な先生にだって直接会いにいけるんです。すごいデザイナーだと思ったらその人が現われそうなところに行って、話すこと、聞くこと。学生だったら失敗しても大丈夫なんですから、そういうチャンスを逃さないこと。そして、自分の興味のあることにきちんと自分自身の回答を得ること。それが一番力になると思います。

Report ● 2

デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻 夏の集中講座 「女子美に集まって、四月と十月の話をします」



7月26日、1313教室にてデザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻 夏の集中講座「女子美に集まって、四月と十月の話をします」が行われました。この講義は午前の部と午後の部の2回実施され、午前の部には雑誌「四月と十月」の制作に携わる10名のクリエイターが講師として、更にスペシャルゲストとして葛西薫氏が、午後の部には、13名のクリエイターが講師として一堂に会しました。

講義の前半には、雑誌「四月と十月」の入稿までの作業の様子や、それぞれのクリエイターの制作風景、アトリエの様子、作

品が映像とともに紹介され、参加した学生にとって、プロのクリエイターの日常を垣間見る貴重な経験となりました。

講義の後半には、「雑誌「四月と十月」は自分自身にとってどのような存在か」というテーマのもと座談会が行われました。一人で制作をするのとは違い、チームでものをつくるということの難しさ、全員でひとつの作品を完成させるという達成感をお話いただきました。そして最後に、この講義を企画し、当日の進行を務めた鈴木安一郎氏（デザイン学科非常勤講師）が学生に向けて、その想いを語りました。

「雑誌「四月と十月」の制作メンバーは、ジャンルが違う人たちが集まっています。人が出会って、一緒にコトを起こして、モノをつくっていく。「雑誌をつくる」ということを通じて、人と人が仲間としてコミュニケーションをとれるということは、とても大事なことだと感じています。社会に出ると、アトリエの中の仕事はだいたい一人、

作品を制作する過程を見たり、作家に会うこともなく、展覧会の作品だけを見るということになりがちだけど、「絵が好きだ」という美術を志したその想いをどう生かし、自分自身の創作活動をどう発信するのか。今日の講義がそんなことを考えるきっかけになればいいと思っています。」

【講師】

青木 隼人（音楽家／グラフィック・デザイナー）
 有山 達也（グラフィック・デザイナー／アートディレクター）
 遠藤 哲夫（フリーライター）
 川原真由美（グラフィック・デザイナー／イラストレーター）
 言水ヘリオ（出版業）
 鈴木 信子（編集・執筆業）
 鈴木安一郎（アーティスト）
 須曾 明子（帽子作家／イラストレーター）
 内藤 昇（アートディレクター）
 野村 辰寿（アニメーション作家）
 牧野伊三夫（画家）
 松本 将次（大洋印刷株式会社取締役営業担当）
 ミロコマチコ（イラストレーター／絵本作家）

「四月と十月」とは

新年度が始まる四月と、展覧会の季節である十月の年に2回、刊行される美術雑誌。参加する作家によって制作運営が行われている雑誌です。

Topics ● 1

財団法人神奈川県公園協会×メディアアート学科学生 神奈川県立公園プロジェクト

神奈川県立公園の来園促進・イメージアップのためのブランディングプロジェクトを、メディアアート学科3年生の授業として2008年より実施しています。

まず「公園」を「交園（＝Communication Parks）」→「coen」と定義。「人と人との交わり、人と自然との交わり」をコンセプトに、キャラクター「coちゃん・enちゃん」およびロゴマークをデザイン。着ぐるみやキャラクターグッズを作成し、「coen de eco! キャンペーン」と称したプロモーションキャンペーンを各公園イベントにて実施。その他ポスターやチラシ等のデザイン制作などに取り組みました。

本プロジェクトではMacBookを1人1台所持するメディアアート学科ならではの強みを生かし、メイリングリスト、スプレッドシートによるスケジュール・出欠・

経理等の管理、情報や資料データの共有、プレゼンスライドの同時作成、ブログによる議事録等、Googleのグループウェアをフルに活用して、多人数ながら効率的にプロジェクトマネジメントを行っています。

本年度は8月1日に行われた相模原公園の夏期イベント「夏休みこども大会」に協力参加。ペーパークラフトの権威 水谷恒雄先生（元清泉小学校教諭）監修のもと、食虫植物のペーパークラフトワークショップを実施。作品完成後は記念写真をその場で渡したり、ジオラマに飾ったりして来場者楽しんでいただきました。その他、クイズラリー、パンフレット、ポスター等の企画制作をしました。

また、サカタのタネ グリーンハウス内で同時開催された「食虫植物展」の説明展示パネル、高さ2mの顔出しオブジェ、オリ

ジナルキャラクターの缶バッジやポストカード等のオリジナルグッズ、大型タペストリーやペーパークラフトの花や蝶による館内および屋外装飾等を作成しました。さらに、撮影編集アフレコを自分たちで行って制作した食虫植物を紹介するアニメーション映像を館内シアターで上映しました。

メンバー学生によるイベント告知記者発表の様子も神奈川新聞に掲載されたこともあり、当日は例年を越える来場者で賑わいました。

参加した学生からは「普段の制作と違い、外部の人に楽しんでもらうという意識が働き、やりがいや達成感もひとしおだった。」等の感想もあり、充実したプロジェクトとなりました。

（現アート・デザイン表現学科メディア表現領域准教授 川村貞知）



顔出しオブジェ



キャラクターグッズがもらえるクイズラリー



ペーパークラフトのワークショップ

Report ● 3 「女子美キャリア・カーニバル2010」レポート

低学年からの就職・キャリアの意識付けを目的に、キャリア支援センター主催で毎年夏に開催している「女子美キャリア・カーニバル」。2010年は、8月1日から4日までの4日間にわたり、前半は杉並、後半は相模原の両キャンパスで開催しました。今年の目玉は3日に行われた「ワークショップ」で、第一線で活躍中の企業デザイナーの方や、本学の教員らによる指導のもと、学生たちは実際の仕事の難しさと面白さを体験しました。また、各業界の現場で働く方に、仕事内容や学生時代についてお話しいただく「仕事研究講演会」や、現在各方面で活躍の本学卒業生による「卒業生講演会」など、盛りだくさんの内容で開催しました。参加者数は4日間でのべ約1,000人におよび、学生たちが将来の仕事のことや、これからの学生生活の過ごし方についてなど、自分のキャリアについて考えるよい機会となりました。



<キャリア・カーニバル2010 スケジュール>

杉並キャンパス

8月1日(日)「卒業生講演会」：佐藤亜美氏&佐藤菜津子氏/高村マドカ氏/秋山さやか氏&鳥居茜氏

※同時開催「保護者のための進路・就職ガイダンス」「ポタニカルアーティスト滝澤栄利子氏による講演会&ワークショップ」

8月2日(月)「仕事研究講演会」：資生堂(化粧品)/コナミデジタルエンタテインメント(ゲーム)/凸版印刷(印刷)/大広(広告)/セガ(ゲーム)

相模原キャンパス

8月3日(火)「ワークショップ」：テキストスタイルデザイナー体験/アニメーション制作体験/プロダクトデザイン体験/セットデザイナー体験/

ファッションデザイン体験/就職や進路に役立つ「自自力」養成講座

8月4日(水)「仕事研究講演会」：タカラトミー(玩具)/ケイ・ウノ(ジュエリー)/花王(化粧品)

卒業生講演会 8/1(日)

■佐藤亜美氏(姉)&佐藤菜津子氏(妹) / 雑貨ショップ経営兼デザイナー

「雑貨するアート」をコンセプトにしたブランドSis.を姉妹で立ち上げ、ジュエリーやバッグなどを展開しているお二人に、起業するまでの道のりやお仕事についてお話しいただきました。

◆女子美での学生生活について

姉「制作の他に、女子美祭の実行委員をやったり、旅行に行ったり、色々なことをしました。女子美祭の実行委員をやった経験は、そのまま今の仕事につながっています。企画をしたりプレゼンをしたり、どうやって考えを相手に伝えるかということも学べました。機会があれば、ぜひ実行委員をやってみてください。」

妹「他大学の人も混ざったインカレのサークルを運営していました。遊園地で鬼ごっこやファッションショー、その他様々なイベントを企画するサークルでした。男女、大学を問わず、色々な人と交流できてよかったです。」

◆二人で起業し、お店を立ち上げるまで

姉妹で一緒に仕事をし、起業するまでは、とても自然な流れだったとお二人は言います。大学院修了後は就職せずに制作活動を続けていこうと決めた、姉の亜美さん。妹の菜津子さんは大学卒業後ジュエリーの専門学校に進み、フリーランスのデザイナーとして制作を行うことを決意しました。

姉「初めはそれぞれ別々に活動をしていましたが、ある時、一緒に展示会をする機会があり、その時に、二人でやっていく手

えを感じました。そこからの流れはとても自然で、より多くの人に作品を見てほしいという思いから起業に至りました。」

妹「起業とは会社に入るのではなく、個人で仕事をしていくと決めたところが始まりだと言います。私たちの始まりは、二人でやろうと決めた時。一緒に仕事をしていく中で、お互いの向き、不向きも見えてきて、仕事の役割も自然に分かれてきました。」

お店を始めるには莫大な費用がかかりますが、お二人が女子美で培った技術や感性が生かされ、とても役に立ちました。妹「短大の生活デザインでは、建築・木工・金工・陶芸と、色々なことを勉強できました。実際お店を立ち上げる時にも、設計図が描けたり、什器の構造がわかったり、素材選びに生かされたり、とても役に立ちました。ほとんど外注せずに自分たちの手でできたので、経費節約に繋がりました。」

◆学生に向けてのメッセージ

姉「やってみようと思ったことは、何でも挑戦した方がいいですよ。旅行したり、海

外に行くのもいいと思います。大学の中だけで活動するのではなく、他分野の人や、違う文化の人と交流することで、自分の立ち位置が見えてくると思います。頭の柔らかいうちに、色々な人と話をし、吸収してください。」

妹「今でも大変なのは毎度のことですが、何でもチャレンジすることをモットーに走り続けてきました。学生時代も、やはり何にでもトライすることが大事です。勉強も遊びも恋も、無駄なことはないと思いますね。」



佐藤亜美氏(左)

2000年女子美術大学大学院 美術研究科 美術専攻 洋画研究領域修了。

佐藤菜津子氏(右)

1997年女子美術短期大学 造形学科 生活デザイン 生活系卒後、ヒコ・みづのジュエリーカレッジメタルクラフトコースに入学。

2002年姉妹で「Sis.」を立ち上げる。2003年お台場ビーナスフォートにSHOP Sis.オープン、同時にコンセプトに賛同する作家の作品の取り扱い開始。2005年原宿に店舗移転。



■高村マドカ氏／ヘアメイクアーティスト

映画・舞台・TVや雑誌など、幅広いジャンルにおいて、フリーのヘアメイクアーティストとして活躍中の高村さん。学生時代は日本画を専攻し、在学中からCDジャケットのメイクを担当するなど、メイクやボディペイントのお仕事をしていたそうです。どのようにして今の道に進んだのか、お話をうかがいました。

◆女子美での学生生活

「学生時代は特別な学生ではありませんでした。人物画が好きで人物画ばかりを描いていました。学生後半、美祭の実行委員や美術系イベントでボディペイントをするようになってから、ヘアメイクやボディペイントに関わるが多くなりました。

進路に関しては、大学院に進学するか、ヘアメイク、ボディペイントのほうに進むか半年位もすごく悩みました。そのことを先生に相談したら、大学院に行かなくても絵は見てあげられるし、展覧会もできると

アドバイスをいただいたことが大きかったです。また、ヘアメイクは年をとってからやろうと思って難しかったことから優先順位をつけてやっていこうと思い、ヘアメイクのアシスタントに就くことに決めました。」

◆学生へのアドバイス

美大卒からアシスタント、事務所所属、独立という経緯はヘアメイクさんの中では珍しいようですが、高村さんにとっては自然な流れだったと言います。

「自分で“こうだからこうあるべき”と思わず、“これ、なんか楽しい”と思えているうちは続けてやっていくべき。それがどういいう職業につながるかというのは、必ずしも自分が望んだ職業ではないかもしれないけれど、人に望まれて仕事はするものという見方もありますから。自分がどれに向いて何が合っているかは、まず、自分が何をやっていて楽しいかということと、人が

それを望んでいるかということのバランスだと思います。私自身ヘアメイクアーティストになろうと思ったことが一度もないまま、ここまでできています。まずは好きなことがあったらそれが専門以外でもどンドンやってみて、飽きるまでやり続ける。それを人が見て、仕事を頼んでくるというのはこれからの時代あることだと思います。」



高村マドカ氏

1996年女子美術大学絵画科日本画専攻卒。大学4年次に松任谷由美のシングルCDジャケット写真のヘアメイクを手がける。卒業後、アシスタントを経て、1998年株式会社アデランス文化芸能室/Studio AD入社。2000年フリーランスとして独立。

■秋山さやか氏／美術作家 & 鳥居 茜氏／国立新美術館 研究補佐員 教育普及担当

秋山さやか氏

◆現在の作品に至るまで

秋山さんは色々な土地を訪れ、自分のあるいた軌跡を地図の上に針と糸で縫いこんでいく、という作品などを創っています。そのスタイルに至るまでの経緯についてお話いただきました。

「私はもともと油絵科出身で、大学（京都の美大）の2年目位までは油絵を描いていました。でも、描けば描くほど、絵の具は物理的にキャンパスの上ののっているのに、なんだか自分の気持ちはキャンパスを通り抜けてしまっているような、違和感を覚えるようになったんです。そんな時にドローイングの授業の中で、自分の歩いた一歩一歩を紙の上に鉛筆で点を打っていく、という作品を創ったところ、油絵では得られなかった、ものすごい満足感を得られました。そこから“あるく”という作品のスタイルが始まり、女子美の大学院進学を機に、この制作方法に絞ってゆくことを決めました。」

◆“継続は力なり”

女子美の大学院1年の時にフィリップモリスアートアワードでグランプリを受賞し、作家としてデビューしてから作家活動10年目を迎える秋山さん。何よりも大事なことは、創り続けることだと言います。「やっぱり、“継続は力なり”。作家としてやっていくとなると、コンスタントに納得

のいく作品を出していく必要があります。作品を創るのにはとても体力がいるし、制作後にはかなりの疲労感があります。デビューしたての頃のように、制作して、ただ楽しいという感覚ではなく、しんどいことも出てきますが、それでも、作品を創ることは面白いし幸せ。創り続けるしかないと思います。」

鳥居茜氏

◆教育普及という仕事について

鳥居さんは国立新美術館で教育普及担当の研究補佐員として活躍されており、付属高校から大学院まで、女子美で学生生活を送りました。

「私はもともと作品を作る側として美術と向き合ってきましたが、今は美術と人をつなぐという仕事をしています。そのような仕事と出会ったきっかけは、大学院1年生の時に参加した横浜トリエンナーレのボランティアでした。そこではギャラリートークを行ったり、ワークショップなどのサポートをしました。それまではギャラリートークに参加したこともなく、作家は言葉で表現できないことを作品にしているのだから、それを言葉で伝えることはできないのではないかと感じていました。しかし、ここでの経験を通して、作品と人との豊かな出会いをサポートできる分野があるんだということを知り、興味を持ち始めました。」

◆アートと人をつなぐ仕事

国立新美術館では定期的にアーティスト・ワークショップを開催していて、2008年には鳥居さんが、推薦作家として秋山さんを講師にお招きしワークショップを行ったそうです。様々な企画を通じてアートと人をつないでいる鳥居さんは、とてもやりがいを感じていると言います。「この仕事は人と接する機会がとても多い仕事です。また、作品をつくることと同じように、自分なりのクリエイティビティを生かすことができるので、とてもやりがいを感じています。」



秋山さやか氏（左）

2001年女子美術大学大学院 美術研究科 美術専攻 洋画研究領域修了。フィリップモリスアートアワード2000大賞受賞。タイムラー・クライスラーグループアート・スコープ2001受賞。現在までに国内外の約35カ所滞制作をしている。

鳥居茜氏（右）

2003年女子美術大学大学院 美術研究科 美術専攻 洋画研究領域修了。2006年国立新美術館設立準備室勤務を経て、学芸課研究補佐員として教育普及を担当。

仕事研究講演会 8/2(月)、8/4(水)

■株式会社資生堂／陣内 昭子氏

“やる気のエンジンは自分でかけて進むしかない”

女子美のOGで、現在資生堂の宣伝制作部でクリエイティブディレクターとしてご活躍される陣内さんにお越しいただきました。陣内さんが実際にデザイナーとして携わった、学生たちにも馴染みがある資生堂の商品のパッケージデザインについてお話しいただきました。パッケージデザインの仕事は決して一人で完結するものではなく、お客様や、商品を販売していただく方にも、商品のデザインを好きになってもらえるような仕事だという言葉に、学生は熱心にメモを取っていました。また、陣内さん自身のキャリアについても触れていただき、女

子美の学生時代に洋画を専攻されていた陣内さんが、専攻の壁を越えてプロダクトデザイナーを志望するようになった経緯、新卒でシャープに入社されてから資生堂へ転職されたエピソードなどをお話しいただきました。講演の最後に、学生に向けて、「みなさんの中にある、将来のキャリアを決めるやる気のエンジンは、みなさん自身でかけて進んでいくしかない」というメッセージがありました。現在資生堂で活躍されている陣内さんからのメッセージは学生達の心に響き、今後のキャリアを考えるにあたって、貴重な財産になったことでしょう。



陣内 昭子氏

1984年女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻卒。株式会社シャープ、デザイン事務所を経て、1990年に資生堂に入社。現在、株式会社資生堂 宣伝制作部 クリエイティブディレクター。

■株式会社タカラトミー／沖津 菜々氏 & 北坂 翠氏

“いろいろ体験して自分を知ること”

株式会社タカラトミーは創業86年。すべての「夢」の実現のためにという企業理念を掲げ、ロングセラーのオリジナルコンテンツ、幅広い年齢層に対応できる商品ラインナップ、ワールドワイドで愛されるブランドを創り出しています。沖津さんは女子美卒で企画開発を担当されています。企画から子どもの手に渡るまで約1年。多くの人と関わり、その過程の多くをプロデュースしていると話しいただきました。「商品化がうまくいかない、終電で帰らなければいけないなど苦しいことも沢山ありますが、根本的には自分がやりたいことなので日々楽しく働いています」と、笑顔で

日々の仕事について語る様子から、その想いが学生の心にもよく伝わったようです。

そんな沖津さんが思う在学中にしておくべきことは、「いろいろ体験して自分を知ること」。好きなこと、得意なこと、活躍できることを大学時代に見極めることだそうです。「早いうちから興味のあること、好きなものを見つけていくと今後の人生に向けて目標が定めやすいので頑張ってください」と、学生に向けてエールをいただきました。講演後には沖津さんが開発した女の子向けのネイルアートセットの現物を熱心に見て、質問する学生の姿が目立ちました。



北坂 翠氏 (左)

現在、株式会社タカラトミー 管理本部 連結人事室 採用教育課。

沖津 菜々氏 (右)

1999年女子美術大学芸術学部デザイン科造形計画専攻 (現・芸術学部デザイン・工芸学科) 卒。現在、株式会社タカラトミー リカ・ガールズ事業本部 ガールズグループ ガールズ開発チーム 係長。

■凸版印刷株式会社／小高 美由紀氏

“デザイナーだけが全てではない”

本学卒業生の小高さんは、セールスプロモーション企画部のクリエイティブチームでディレクターとして活躍されています。主に店頭プロモーションや、POPの企画・制作に携わっています。本学のデザイン学科VCDコースを卒業された小高さんは、デザイナー職ではなくディレクターとして活躍されていて、「ディレクターはデザイナーと違い、自分では手を動かしてデザインの制作を行いません。デザインを含めた全体をコントロールして、スタッフを統括していくのが役割です」と、その仕事をわかりやすく説明してくださいました。ディレクター職のやりがいについては、「自分の

考えたものが世に出回ること」、「ものづくりに深く携われること」、「ほぼ毎日やることで違い、流行の最先端に触れていられること」だと言います。

美大生の目指すべき職業はデザイナーだと考えている人が多いかもしれませんが、小高さんの「デザイナーになるだけが全てではない」という言葉は、多くの学生の心に響いたようです。「同じ「ものを作る」ということでも、やり方は人それぞれです。自分の手を動かして作るだけではなく、面白いアイデアを考えたり、提案するのが好きという人もいます。自分に一番合った仕事を見つけてほしいと思います。」



小高 美由紀氏

2009年女子美術大学芸術学部デザイン学科VCDコース卒。現在、凸版印刷株式会社 情報コミュニケーション事業本部トッパンアイデアセンター プロモーション本部 SP企画部 クリエイティブT。

参加者の声

ゆっくりとした学生生活の中で、どれだけ自分から積極的に動き、危機感ややる気を早くから見つけ出せるかということが大切なのだと思います。(資生堂／美術学科1年) 美大を出たとしても、デザイナー以外の職種につけるといのはとても興味深い話でした。(凸版印刷／アート・デザイン表現学科1年) 広告会社に入った後の活動の様子が、だいたいイメージできました。アイディアの出し方も教わることでよかったです。(大広／造形学科1年) ゲームには色々なデザイナーたちが携わっているんだなと思いました。3Dデザイナーの種類の多さに驚きました。(セガ／絵画学科2年)

ワークショップ 8/3(火)

■テキスタイルデザイナー体験

～テクスチャーと図柄（パターン）～

講師：山本清氏（テキスタイル・サーフェスデザイナー／本学大学院客員教授）

洋服やインテリアなど、私たちの生活の身近にあるテキスタイルデザインの基礎を学ぶワークショップです。前半は絞り染めの技法を用い、折った半紙にインクを染み込ませ、様々な柄や色彩の作品を作りました。絞り染めの面白さと奥深さを感じ取り、それぞれが個性豊かな作品を創りあげていました。後半はそれぞれ持ち寄った素材をもとに自由に図柄を描き、ティッシュペーパーやテープなどを使って斬新なデザインを創りあげました。「これはカフェの壁紙に使える」、「これはTシャツの生地になる」など、先生からの講評を通してテキスタイルデザイナーの仕事を感じました。



■セットデザイナー体験

～音・文字からのイメージを形にしよう～

講師：石附千秋氏（株式会社日本テレビアート制作デザインセンター長、照明部長）

人気のドラマ、バラエティなどのセットデザインを手がける方を講師に招き、現場の仕事に近いワークショップを実施しました。内容は、「文章からイメージできる情景のデッサン」と「音楽を聴き、そのイメージのデッサン」の二つで、最後に講評会を行いました。講師の方から、「女性ならではの世界観、エネルギーを感じる作品が多い」とコメントをいただきました。参加者は、文章・音楽からイメージを描くといった、普通の授業ではできない体験を通して、テレビ業界で必要な独自の世界観を表現することの難しさ、楽しさを感じることができたのではないのでしょうか。



■アニメーション制作体験

～基本的なアニメーション制作～

講師：村田朋泰氏（アニメーション作家／本学デザイン・工芸学科准教授）

アニメーションの基礎となる、コマ撮り手法によるアニメーション制作を行いました。1枚の紙に木炭で絵を描いてデジカメで撮影し、それに少しずつ変化を描き加えて撮り重ね、パソコンで画像を繋ぎ1つの動画にします。多い人で100枚ほどの画像ができますが、動画にすると約16秒の短い作品になります。最後に作品を大きなスクリーンに映し出し、描いた絵が動くのを見て感動するとともに、大きな達成感を得たようです。「どんなに小さい作品でも継続して作り続けていけば強いものになる」という、今後の制作活動につながる自信を得ることができたのではないのでしょうか。



■ファッションデザイン体験

～アート・芸術を日常で着たい服へ～

講師：宇津木えり氏（mercibeau coup, デザイナー）

本学学生からの人気も高いデザイナーの方をお招きし、ファッションデザイン体験を行いました。当日「星」というテーマが出され、学生はそこから連想するイメージを膨らませ、デザイン画を制作しました。ある学生は夜空に浮かぶ星座をちりばめた洋服をデザインし、ある学生は宇宙服をベースにしたトータルコーディネートをデザインしました。最後の講評会では各々が作品に込めた想いやストーリーを発表しました。このワークショップを通して、ファッションデザインの基礎だけでなく、イメージを形にすることや、それを人に伝えることの難しさ、面白さを学んだようです。



■プロダクトデザイン体験

講師：大見恭三氏、水谷敦氏、鈴木康友氏

（株式会社東海理化 技術開発センターデザイン部）

自動車のスマートキーのデザインとモデル制作をするワークショップです。前半はアイデア出しと図面制作を行いました。各々の案を発表し、講評をいただいた後、それを元に後半はスタyroフォームという素材にカッターや紙やすりを使い、モデルを制作しました。参加者は限られた時間やサイズの中でアイデアを出すこと、使う人の要望を考えてデザインすること、初めて体験する素材や作業に戸惑いながらも熱心に、そして楽しんで取り組んでいました。サイズや形に多少の誤差があったりしましたが、自分が描いた平面が立体となった喜びは大きかったようです。



■就職や進路に役立つ「自分力」養成講座

～自分を知って「力」にするエクササイズ～

講師：松本博子氏（株式会社デザインセンター 家庭機器デザイン担当 参事／本学非常勤講師）、大橋由三子氏（南バスキューデザイン代表／本学非常勤講師）

進路や就職活動においては、自分の「得意なこと」「興味」「性格」「個性」「癖」等を自身で把握し、それを「最強の武器（力）」「オリジナリティ」とする『自分力』が必要です。このワークショップでは、「自身の持ち味を最大限に生かすこと」をコンセプトに、講師が用意した様々な素材・画材の中から各自好きな材料を使用し、作品の制作を行いました。また、制作後全員が「そのコンセプトを自分なりにどう表現したか」を発表し、その自身の持ち味を「言葉を通して、人に解り易くどう伝えるか」というプレゼンテーションスキルも学びました。



Series ● ● ● 先生のお仕事を覗く② 映像ジャーナリスト 河邑 厚徳 教授

アート・デザイン表現学科メディア表現領域で教鞭を執る傍ら、映像ジャーナリストとして制作を続ける河邑厚徳教授。映像を通して数々の問題提起をし、国内外で高い評価を得てきた河邑教授がこの夏制作した、映画監督 新藤兼人氏の作品『一枚のハガキ』を記録したドキュメンタリーについて、本誌に寄稿していただきました。

永遠なる創造力

私は、女子美で教えながら、ドキュメンタリーの制作も続けている。この夏は、映画監督・新藤兼人さんの遺作を記録している。九十八歳の新藤さんには死ぬ前に完成したい執念の作品がある。自ら映画での「遺言状」と語る『一枚のハガキ』。

五月十六日、調布の日活撮影所で撮影が始まった。百歳近い新藤さん、普段の様子は要介護の高齢者にしか見えないのに、顔も身体も別人に変わった。私は、心で人は変わるのだと確信した。残された仕事小さな奇跡を起こしている。戦争を体験した言論人が次々と世を去るなかで、戦争の記憶を未来へ伝える重み。新藤さんは、軍隊で陰湿なしごきなどを受け、骨身で戦争の痛みを知る一人だ。八十歳を超え六本の映画を撮ったが、いよいよ限界を感じ最後の作品となる。

「とことん僕の中心にいっぺん手を触れて見たいと思います。」

台本を読んだ。簡潔に強いメッセージがあふれ出ていた。テーマは戦争。新藤兼人の戦争体験が時間をかけ発酵し澄みきっていた。描かれるのは、人生を終えようとする情景ではなく、希望へ向かって歩き始める物語である。廃墟の上の広い青空。あの時代を生き残った日本人が、共有したある透明な感覚。それを新藤さんは原罪と語る。私は、その感覚が戦後の日本を支えたモラルの核だと思う。

昭和十九年三月、丙種合格だった三十二歳の新藤さんに赤紙が来た。「一億挙げて戦闘配置へ」のスローガンが叫ばれ、百人のオジサン部隊が、広島県呉の海兵団に集められた。



映画監督 新藤兼人氏

奈良の天理教本部を掃除し、海軍予科練兵を世話することが任務だった。掃除が終わると上官がくじを引いて六十名が選ばれ、フィリピンの陸戦隊となった。親も妻も子もある戦友たちは船に乗せられたが、アメリカの潜水艦にやられて全員が死んだ。残った四十人から三十人が再び上官のくじで、潜水艦の乗組員となった。全員死亡。残った十人から四人が海防艦へ乗って死亡。残ったのは六人。新藤兼人はその中にいた。「百人のうちの九十四人は死んでしまって、私は生きているからですね。原罪としての罪。私がなぜ生きているのか、運が良かったということじゃあすまないでしょう」老兵を戦死させ、くじ引きで生死が決められる戦争は何か。新藤さんは考えた。どうも世間では戦争の本質が理解されていない。新藤さんが自分の目で見て、その後長く考えてきたことを映画にすることが、生き残った者の責任だと思った。

六十年たっても、忘れられない一枚のハガキがあった。カイコ棚のような兵舎で上のベッドで寝ていた農民兵。フィリピンへ行く命令を受けて感極まったのだろう。新藤さんに妻からの手紙を見せた。その文面が若きシナリオライターだった新藤さんの胸をえぐった。心を打つセリフを書くのが仕事の新藤さんに、ハガキは切々と訴えてきた。遺作は、このハガキを軸に作られている。

「今日はお祭りですが あなたがいらっしゃらないので 何の風情もありません」

検閲で、素直な言葉が書けないので返事は出せなかった。ハガキを抱きしめ、農民兵は海のもくずと消えた。戦争は終わったが、新藤さんの心から農民兵の無念さと、ハガキを書いた妻への共感が消えなかった。シナリオは、その妻がどう暮らし、どんな家に住み、どんな戦後を歩んだかが描かれている。

新藤さんは、ひそかに撮影中に自分が倒れることも覚悟していた。最悪の事態を想定して、助監督や孫の新藤風さんが演出できるようにと沢山の絵コンテ（イメージ画）を描いていた。絵はスケッチ帳五冊にわたって描かれている。演技のイメージが筆の勢いや鮮やかな色彩で表現されている。この絵コンテを見ていると、創作の秘密も見えてきた。最初には、ハガキの文章が鉛筆で書かれている。すべてはここから始まっている。続いて味のある農家のスケッチが何枚も描きこまれている。家の回りの風景、間取り、室内の家具や調度品。典型的な日本の農家を、戦争が襲いかかり破壊した。「戦争は、戦場で戦うんです



河邑 厚徳教授

が、本当は後に控えた家をつぶすわけでしょう。一人の兵隊が死ぬとその家が滅茶苦茶になってしまう。戦争は、家族も家も全部つぶしてしまう力を持っているんです。その意味で貧しくても美しいワラびきの農家を作りたいんです。土の上しっかりと建った農家ですね。」戦闘の場面がない映画だが、新藤さんは全国で兵隊を送りだした農家が、もう一つの戦場だと主張している。自然の中にたたくむ農家を美しく撮りたいと考えた。予算がない中で、美術スタッフは見事な農家のセットを作り上げた。この農家で起こる悲劇が絵コンテで描きこまれている。出征・電気もないのでハガキを月夜の晩に書く友子・戦死の公報・英霊の紙だけ入った白木の箱・家を守るため弟と再婚・弟も戦死・父の病死・母の自殺・未亡人となった友子への誘惑・平和な暮らしは破壊され、妻の感情は爆発する。その絵コンテは激しく強い。新藤さんのエネルギーがたぎっている。新藤さんの創作力の源泉の一つは、生き残った責任と戦争の真実を見たという体験だった。「将校や下士官と違って、最低の所から、命がけで見てきた。僕はつまり戦争の裏側を見たという気がしています。私は生き残った。だからこの映画を作るんです。」

映画は撮影が終わり、現在ポスプロ（※）が進んでいる。公開は来年の夏になる予定だ。九十八歳で輝き続ける新藤さんに皆も出会ってほしい。そして創造力の力を知ってほしい。

※ポスプロ…撮影完了後の全ての作業のこと。編集はもちろん、音編集や色調整（カラーコレクション）、なども含む。

河邑厚徳

（アート・デザイン表現学科メディア表現領域教授）1948年生まれ。映像ジャーナリスト。東京大学法学部卒業後NHKでドキュメンタリー制作を続ける。一貫して目に見えない精神世界、理論物理学、神話等の映像化にチャレンジ。内外の映像祭での受賞多数。「シルクロード」「アインシュタインロマン」(NHK・DVD)「日本その心とかたち」「チベット死者の書」(ふるさと伝承) (スタジオジブリ・DVD)

NEWS ● ① 成田空港駅に佐野めい学長・吉武研司教授の作品設置

2010年7月17日に開業した都心と成田空港を結ぶ「成田スカイアクセス」の成田空港駅に、佐野めい学長のステンドグラス作品がパブリックアートとして設置されました。また、空港第2ビル駅には、短期大学部造形学科美術コース吉武研司教授の陶板レリーフの作品が設置されました。

佐野学長の作品「動く青い世界地図」は自身の原画をステンドグラスに表現したもので、横5.9メートル、縦2.8メートルです。吉武教授の作品「おー日本よ」は伝統的な陶板レリーフで制作された作品で、横6メートル、縦2.8メートルです。各駅をご利用の際にはぜひご覧ください。



成田スカイアクセスの竣工式に列席する佐野学長と吉武教授



佐野学長の作品「動く青い世界地図」



吉武研司教授の作品「おー日本よ」

Report ● ④ 大学院GP CCD PLATFORM 001 シンポジウム「アートと地域、アートとコミュニティ」

大学院 GP (※) では、7月14日に、相模原キャンパス1214教室において、「CCD PLATFORM 001」と題したシンポジウムを開催しました。「アートと地域、アートとコミュニティ」をテーマに、地域とコミュニティに対するアートの可能性と在り方について広く討議する場を設けました。パネリストに、コミュニティ・スペース「三田の家」、「芝の家」を運営する坂倉杏介、インディペンデント・キュレーターのチェ・キョンファ、アーティスト・ユニット jet's boys の大平暁、クリエイターのための無料法律相談などを行う非営利組織 Arts and Law 代表の作田知樹を迎え、各氏を中心として討議は進められました。

近年、規模の大小を問わず、アートを介した地域活性化を謳ったプロジェクトが非常に多くみられるようになってきているなかで、CCD (Community Cultural Development: コミュニティの文化による発展) の本来の語義に立ち返り、本当にアートによるコミュニティの発展は可能なのかということを考えてみようというところからこの企画は始まりました。アート・フィール

ドにおいて様々な立場で実践する方々をお呼びし、学生を交えながら討議を行うことで、文化・アート活動が社会的マイノリティや地域コミュニティにもたらす影響と可能性を探り、その実践フィールドにおける人・社会・アートの相互の関係性の本来の在り方を捉え直していくという試みです。会場参加型のラウンド・テーブルを実施することで、学生・パネリスト・参加者がより積極的に発言する場となりました。

パネリストの実践例を主体に討議は進み、様々な問題点が浮かび上がりました。特異なコミュニケーションばかりが目立ち、本来あるべきコミュニティの必要性が希薄になっているのではないかと。越後妻有の成功例を見て、日本各地の町づくりでアートを安易に持ち出しているのではないかと。各地に設置された「作品本来の輝き」を考えると後回しにされているのではないかと。など客観的にアート・シーンを見つめ直す必要性について意見がでました。討議終了後にもパネリストへ質問する場面も見られ、学生たちが各々考えを持ち、自身やその周りの環境を見つめ直す機会となりました。

次回のお知らせ

CCD PLATFORM 002 “誰のためのアートなのか”

佐藤李青×杉田 敦×富田俊明×毛利嘉孝
日時：2010年10月6日(水) 18時~20時
場所：小金井アートスポット シャトー2F (JR中央線武蔵小金井駅南口徒歩5分)
協力：小金井アートフル・アクション！
4名のパネリストを中心に、芸術・文化活動を介した社会的実践がその地域や生活する人々にどのように扱われ、またその場所でどのようにアーティストは実践をすることが可能なのかなどを討議します。
予約はこちらへ
joshibigsgp@gmail.com

※大学院GPとは

「組織的な大学院教育改革推進プログラム」のことで、文部科学省が各大学における教育改革の取り組みがより一層推進されるように、特色のある優れた取り組みを選定し、その支援を行うものです。女子美は芸術系大学の専門教育機関の特性を生かし、大学院教育の実質化に根ざした教育プログラムを申請し、採択されています。



International ● ① 留学生交流会を両キャンパスで開催



2010年度外国人留学生交流会を6月8日(杉並キャンパス)、同9日と16日(相模原キャンパス)の3回にわたって学生食堂で開催し、各日に20名、14名、13名の外国人留学生と国際交流に興味がある日

本人学生が参加しました。会の序盤ではお互いに知り合いが少なくぎこちなかった学生たちですが、ビュッフェをとりながらグループでの自己紹介を進め、次第に和やかなムードに包まれていきました。紙に書かれた質問の内容に当てはまる人を探すゲームや、会の参加者の名前を番号の代わりにカードに書き入れるビンゴゲームでは大いに賑わい、テーブルを回って多くの人に話しかけて質問をするうちに、初めて話す人とも打ち解けていた様子でした。また、日本語に不慣れな協定外国人留学生に日本人学生が丁寧に英語でゲームの説明をしたり、

外国人留学生が母国で人気のあるゲームを紹介したりする一方、学生同士がお互いの国や文化について発表するなど、積極的な異文化交流が見られました。会の終わりには、連絡先を聞きあって、今後一緒に出かける計画をたてる学生たちもおり、名残惜しい雰囲気です。終了後のアンケートでは、「会のおかげでこれまで親しくなかった人と話ができた」と答えた学生が9割を超え、友達づくりと国際交流のきっかけとなったようです。今後も国際交流活動に積極的に参加してほしいと思います。

(国際センター)

International ● ② 2010年度協定外国人留学生の留学レポート(中国編)

現在、大学と短期大学部は世界7大学と学術交流協定を締結し、学生交流を積極的に推進しています。2010年度前期は広州美術学院(中国)から2名、ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学文化学部(フィン

ランド)から3名の計5名が大学芸術学部へ協定留学し、正規の実技・演習系授業科目に取り組みました。今回は、広州美術学院から派遣されたシェン・ナンさんの留学レポートをお伝えします。(国際センター)

シェン・ナン(本学での所属:芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻)

日本での4ヶ月間は素晴らしい思い出となりました。日本語力が低いため、私は授業や課題制作時に多くの困難に直面しました。そんな時、先生方は重要なポイントを何度も繰り返して説明してくださいました。協定外国人留学生だからといって特別扱いするのではなく、他の学生と同じように指導されたのは、日本と中国の大きな違いだと思います。また、課題の出来がよくないときも、そのことを率直に言った上で助言

してくださいました。私は先生方のアドバイスののおかげで多くのことを学びました。一方、先生だけではなく、女子美の友人のことも恋しくなるでしょう。彼女たちは非常に親切で友好的でした。私が困った場面に遭ったときは、やさしく手を差し伸べてくれました。言葉の壁があるにも関わらず、言語以外の他の手段でお互いを理解しあうことができ、面白いことだと実感しました。



先生から指導を受けるシェンさん



順調な作品制作に笑顔

International ● ③ 台湾での留学生向け進学相談会に出展しました

本学は、外国人留学生の受入れを国際交流推進の大きな柱と位置付けており、積極的な留学生募集活動を展開しています。2010年度は大学と短期大学部を合わせて96名の外国人留学生が在籍し、学位取得を目指して日々学修を重ねています。この人数は4年前(2006年度)の3.2倍に上り、受け入れ数は毎年増加しています。特に、留学生全体の97%を占める韓国、中国、台湾の3カ国・地域からの受け入れをさらに増やしていく計画です。留学生募集活動の一環として、今年度から(独)日本学生支援機構が前述3カ国・地域の6都市

で開催する日本留学フェア(留学生向け進学相談会)にブース出展することになりました。7月24日と同25日に開かれた台湾2都市(高雄、台北)の会場では、現地の日本留学熱がはっきりと感じられ、終日熱気に包まれていました。本学は関東地区唯一の美術・デザイン専門大学として出展していたため、女子生徒・学生とその保護者を中心に100名を超える留学希望者から問い合わせを受けました。質問は多岐にわたり、主な内容は、日本での生活全般、美術・デザイン留学特有の入試実技、奨学金や授業料減免制度、住まいのことなどでし

た。特徴的だったのは、台湾で非芸術分野の4年制大学を卒業した後に、日本へ留学して美術・デザインを専門的に学びたいという方が多かったことです。(国際センター)



Topics ● ② 女子美生による新しい仏壇の提案

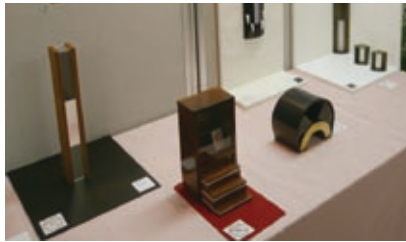
2007年から始まった、日南貿易(株)・(株)カナクラとの、産学連携プロジェクト「現代仏壇コンペティション」の3回目は、デザイン学科プロダクトデザインコース3年生の実技課題「祈りのインテリア」(3週間)として、様々なデザイン提案を試みました。デザインプロセスにおいてポイントとしたのは下記の3点です。

1. 現代におけるライフスタイル(生活空間)とは?
2. その空間における道具(家具)とは?
3. 自分にとって「祈り」とは何なのか? そのカタチは?

自宅に仏壇がある人、祖父母の家に仏壇がある人、仏壇なんて見たこともない人、身近に故人すらいない人・・・等々、各人の生活環境からの発想や、調査項目、考察

点などは多種多様でした。それが現代の日本人の「祈り」の「カタチ」なのかもしれません。23名の女子美生が「祈りのインテリア」として「新しい仏壇」をデザインし、その成果は、2010年4月2日～3日、有楽町の交通会館「(株)カナクラ仏壇展示会」の一角で展示発表され、専門業者からも大いなる賛辞をいただきました。

(デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻教授 田村俊明)



Topics ● ③ “よさこい祭り”に参加したがやき

記録破りの暑い夏のさなか、8月9～12日、高知市で第57回よさこい祭りが開催された(本祭は10、11の両日)。総出場チーム数188。踊り子総数約18,000人。競演場・演舞場は17を数え、各チームが先を競うように入り乱れて踊るさまは、まさに壮観の一語。

この熱い祭りに、同窓会高知支部(山岸孝子支部長)を中心とする「女子美術大学」チームが、初めて参加。県の内外から馳せ参じた踊り子63名に、スタッフを加えた総勢70名の一団(卒業生が大半を占めるが、在学生と教職員も参加)は、本祭初日、まず桂浜の坂本龍馬記念館前の広場で踊り初め。この記念館に同窓生2名が勤務する縁で、特別に許可されての演舞である。炎天下、観光客の拍手を浴び、踊り子とスタッフのボルテージはいやが上にも高まった。こうし

て、二日間で計10ヶ所の会場を巡り、どの会場でも女子美の魅力をいかに発揮してみせた。

二日目の朝、チームを代表して4名がラジオの生番組に出演し、大いに女子美をPR。午後は一転、激しい雨。しかし、女子美チームにひるむ気配はなく、踊り子もスタッフも各会場で熱演を見せ、次々とメダルを獲得。初出場ながら、堂々たる成果を得た。2歳(同窓生の子息)から72歳まで、「かぶくゆかた」に身を包んだ多彩な個性が、「女子美」の旗の下ひとつになり、その華やかで凛々しい姿を人々の脳裏に深く印象づけた。

創立百十周年という記念の年に、振付や歌を初め、すべてを一から準備し切った高知支部の心意気が、「女子美」の心意気となって花開いた二日間であった。

(文: 林正寛、写真: 細谷夏季)



息もピタリと



高知城をバックに

NEWS ● ② 青谷徳子さんハスクバーナ賞 受賞

スウェーデンのハスクバーナ社は300年以上の伝統をもつ製造メーカーです。1689年に国立工場として創立し、現在はチェーンソーから幅広い家庭用機器を製造しています。1872年よりミシンの製造を始め1979年にはハスクバーナ社として初のコンピュータミシンを開発し、世界の刺繍作家やマシーンキルト作家に愛用されています。

2001年度からバイキング ソーイング マシーンズ ジャパン社より、そして、

2006年度からは株式会社ジューキ ハスクバーナ事業部より、授業にハスクバーナミシンを使用している女子美術大学修士課程美術専攻工芸(刺繍)・短期大学部造形学科デザインコース クラフトデザイン系刺繍を対象として卒業制作および修了制作において最優秀作品を制作し、将来専門分野で活躍が期待される学生に賞が授与されています。

ハスクバーナ賞受賞者

青谷 徳子 (大学院美術研究科修士課程 美術専攻工芸(刺繍)2年)



【いろろ】/パネル/タテ120×ヨコ107.5cm/シルクオーガンジー、絹糸、レーヨン糸、メタルヤーン、和紙、アクリル

Report ● 5 六興電気の新ユニフォームをデザイン開発

女子美デザインセンタープロジェクト（ファッション造形学科内）は、六興電気株式会社の新ユニフォームのデザイン開発を約1年間に渡り行い、この度完成しました。

昨年夏、創業60周年を機にユニフォームを刷新したいという六興電気株式会社からの依頼を受け、学生からイメージデザイン画を募集するコンペを行いました。150名ほどからデザイン画の応募があり、審査の結果、土屋文さん（ファッション造形学科4年）、成清有花さん（同2年）、関みのりさん（アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域1年・応募時は付属高校生）のデザインが準グランプリとなり、新ユニフォームのデザインイメージとして採用されました。ユニフォームはデザイン、機能性に加え安全性が求められる特殊な仕事であったため、実際にユニフォームとして適正な素材・形態・縫製・部材など総合的なデザインディレクションを眞田岳彦教授が担当し、小倉文子教授を中心に女子美衣服領域卒業生から構成された女子美デザインセンタープロジェクトスタッフとともに受託研究として制作を行いました。

7月23日には六興電気株式会社で3名の学生を表彰する受賞式が行われました。3名の学生がこだわったポイントは「仕事で作業着を着ている父親などに聞いて、通勤時にも着られるものを考えました。」（土屋さん）「私の父も作業着を着て働いています。ポケットなどの機能性を重視しました。」（成清さん）「動きやすさを最も重視しました。」（関さん）とのことでした。

六興電気株式会社社長の長江洋一さんか

らは、「着ていて自然で、すごく機能性が良い。そしてその辺を歩いていてカッコいいんです。紺地に黄色は目立つし、少し変わったことをする会社というイメージを作ってくれていると思います。ユニフォームは社員であることを表現する大きなツールです。他社より半歩先を行きたい、そういう会社の理念があるのですが、それがうまく体现されています。」とのコメントをいただきました。

社員の方からは、「すごく気に入ってます。通勤のときもこのパンツにTシャツを合わせて着ていますが、そういうときでも作業服っぽく見えません。」（東京本店工事部 鈴里英正）「電機業界でこの色の作業服はあまりなくて、珍しいし、高級感があってよいなど。前の作業服は嫁から『着替えていきなさい』と言われたのですが、今は言われません（笑）。」（東京本店工事部 宮崎主税）といったコメントのほか、機能性についても、「パンツがフィットしていつも動きやすいので驚いています。足首のチャックとマジックテープによって引き締まったように見えます。」「内側のポケットが便利。」などの高い評価をいただきました。

製品化された新ユニフォームの流通は女子美術大学事業法人アイシスが担当し、六興電気株式会社の社員約700人の他、現場スタッフなどを含めたおよそ1000人の方が着用しています。ユニフォームは会社の顔であり、象徴です。いつまでも社員の皆様に愛され、誇りを持って着ていただけることを願っています。



六興電気株式会社社長の長江洋一さん



左から関 みのりさん、成清 有花さん、土屋 文さん



NEWS ● 3 公募展受賞者紹介

第26回公募 2010日本ジュエリーアート展 審査員特別賞

高田 文（大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域1年）

アートアワードトーキョー2010 審査員賞（木幡和枝賞）

戸田 沙也加（大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域1年）

第5回 栃木の5月の美術大賞 奨励賞

谷中 美佳子（芸術学部絵画学科日本画専攻4年）

AACポスターコンペティション2010 最優秀賞

斎藤 菜月（芸術学部デザイン学科環境デザインコース4年）
増川 友梨（芸術学部デザイン学科環境デザインコース4年）

第11回 銀粘土でつくる シルバーアクセサリーコンテスト 学生賞

奥村 巴菜（芸術学部工芸学科陶コース4年）

第12回 雪梁舎 フィレンツェ賞 入選

谷中 美佳子（芸術学部絵画学科日本画専攻4年）

相模原市男女共同参画シンボルマーク 優秀賞

本田 浩子（芸術学部メディアアート学科4年）



J A M ● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

JAM展覧会報告

Identity わたしが1するわたしの時間

芸術学科4年生プロデュースによる今年度の展覧会では、自分の過去の写真の展示を通して、Identityとは何かを問いかけました。会期中には70代の女性をゲストに迎えたガールズトークイベント「六枚の写真で綴る女の一生」や、桜台小学校5年生とのワークショップ「一番〇〇な写真」など、学生企画によるイベントも実施されました。
(4月12日～5月5日)



日本画をまなぶ

—女子美術学校における日本画教育—

本展覧会では開校から戦前までの日本画科の教員・卒業生の作品を紹介しました。初期教員は、河鍋暁斎の娘である河鍋暁翠や女子師範学校創設当初より絵画を教えた武村耕齋など当時としては貴重な存在であった女性画家が務めました。大正期には栗原玉葉や柿内青葉など本学の卒業生から教員となる画家が現れます。この4人の女性画家以外にも、当館コレクションから日本画科の教員・卒業生の作品を紹介しました。
(5月14日～6月6日)

JAM展覧会予告

パリで暮らす、つくる。

—創立110周年記念展 女子美パリ賞+α—
「女子美パリ賞」は、女子美術大学創立100周年記念に創設された大村文子基金による、大学院生および卒業生を対象とした賞です。受賞者は、女子美術大学が所有するパリ国際芸術都市（シテデザール）のアトリエに研究員として1年間滞在し、制作・研究に励みます。

今回の展覧会では、第10回までの女子美パリ賞受賞アーティストの作品を紹介するとともに、関連展示やイベントでは、女子美術大学の学生が「+α」としてコラボレーションし、受賞者たちのフランスでの暮らしや制作の様子も紹介します。
(9月17日～10月24日)

ポルトガル現代美術展—極小航海時代— the age of micro voyages

現在、国際的に活躍する3人のポルトガル人アーティスト、ジョアン・タバラ、マリア・ルジターノ、ミゲール・パルマと映画監督であるベドロ・コスタの作品を通して、現代のポルトガルのアートシーンの一端を紹介しました。今年日本・ポルトガル修好通商条約締結150周年にあたる年でもあり、オープニング・パーティーにはポルトガル大使にも出席していただきました。
(6月19日～8月1日)



造形さがみ風っ子展

相模原市教育委員会主催による、小中学生の作品展です。
(10月30日～11月1日)

110周年記念 何香凝芸術名作展

—女子美術学校卒業100周年記念—

何香凝(かこうぎょう、1878-1972)は、明治末期、中国より来日し、私立女子美術学校日本画撰科高等科に学びます。1911年(明治44)卒業後、帰国し、政治活動と絵画制作を続けました。その偉業により1997年、中国・深圳に何香凝美術館が設立されました。本展覧会は、何香凝美術館所蔵作品を展示し何香凝の画業を紹介します。
(11月19日～12月5日)

銀座gallery女子美展覧会報告

土井敬真展-そしてこの先にあるもの—陽会を中心に活躍中の立体アート専攻非常勤講師・土井敬真による等身大の自刻像を中心とした木彫作品個展。
(4月7日～5月8日)

鈴木典生展

現代野外彫刻展「雨引の里と彫刻」をはじめとして野外展を中心に活動し、野外彫刻ならではのコンセプトを展開している石彫作家・立体アート専攻非常勤講師・鈴木典生による個展。
(5月16日～6月12日)

内藤友博・浜田周展

行動美術協会で活躍中の内藤友博先生・個展を中心に活躍中の若手作家浜田周先生による立体アート専攻非常勤講師の金属彫刻2人展。
(6月14日～7月10日)

永田治子展-in bloom-

挿絵・装丁・イラストレーション・テキスタイルデザイン等幅広く活躍中の、立体アート専攻非常勤講師・永田治子による絵画と彫刻(石膏作品)の個展。
(7月12日～7月22日)

柳井嗣雄展

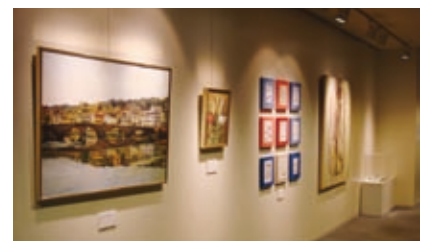
独自の紙漉きの方法によるペーパーワーク(ファイバーワーク)、ドローイング、オブジェ等幅広い活動を展開している立体アート専攻非常勤講師・柳井嗣雄によるペーパーワーク展。
(7月24日～8月9日)

長谷川由美展

自由美術協会を中心に活躍中の立体アート専攻非常勤講師・長谷川由美による彫刻(石膏作品)とテラコッタの個展。
(8月19日～9月4日)

学外作品展(杉並区役所区民ギャラリー)

第2回作品展「11の視点」女子美術大学付属高等学校・中学校美術科教諭担当作品展
(6月1日～6月17日)



Lecture ● 2 アール・ブリュットについて 野見山暁治×入江観対談



左から吉武研司教授、野見山暁治氏、入江観氏

2010年5月7日、短期大学部で洋画家の野見山暁治氏と入江観氏の対談を行いました。テーマは「アール・ブリュット」。短期大学部造形学科美術コースの吉武研司教授の司会進行のもと、スクリーンにはさまざまなアール・ブリュットの作品が上映され、野見山氏と入江氏が議論を交わしました。

生の芸術を意味するフランス語の「アール・ブリュット」という言葉は、専門の芸術教育を受けていない人が生み出した自由な表現による芸術作品についての総称です。子供や心身に障がいを持つ人の作品、美術教育の行われない開発途上の地の人々によるもの、その他にも服役中の人が獄中で生み出したものなどについて、広く称されてきました。英語では「アウトサイダー・アート」と訳され、近年日本では、これらの言葉は、障がいのある方々の手によるアートを表現するものとして使われる傾向が強くなっています。

この授業は、昨年より文部科学省に選定された「大学教育・学生支援推進事業」の「障害理解とアートフィールド参画支援の取組」の一環として短期大学部共通科目で行われたものです。大学で芸術を学ぶ学生たちにとって、彼らのアートがどのようなメッセージを持つのか、お二人によってさまざまな意見が交わされ、また学生からのアンケートには、貴重な感想が寄せられました。

描きたいものが即出てくる不思議さがある

スイスのローザンヌにアール・ブリュットの作品を集めた美術館があり、ジャン・デュビュッフェのコレクションがもとになっています。アール・ブリュットの作品に出会った時、野見山先生は、親が叱っても絵を描き続けていた子どもの頃のことを思い出したといいます。「それを忘れないで描き続けているのが絵描きだと思います。でも、ぼくらは描きたいというのと同時に批判精神をもたなければならない。今まで

と同じじゃないいけないと思って、自分を追いやっている。キャンバスに線を引いて、そこからあるものを画面に描いてみる。何もないものからやっていると思いついて描いてみるけど、何かあるんだね。それを探っている。それに対して、アール・ブリュットの人たちは、「描きたいというものが即、出てきているように思える。あのすぐ出てくるのは見ていて不思議」（野見山）

入江氏は、アール・ブリュットというジャンル分けに疑問を感じているそうです。「ブリュットが意味する“生の”とか“純粹の”ということは、芸術にとってあたりまえのことで、障がいや病気でない人の作品にも、よい作品にはそういうものがあると思っています。ただ、違いは何かを考えると、よく良い絵描きは自分の中にいい批評家を内在しているといいますが、アール・ブリュットの人たちは、批評家の存在を自分の中に抱えているのかどうか？」(入江)

彼らの作品のすばらしさを知ること

アール・ブリュットの定義として、アカデミズムの教育を受けていないということがあります。美大の先生をご経験された立場から、野見山氏は「僕らは好きで自分で絵を描いていると思っていても、クラシックからの教養という流れを受けて、その中で絵を描いている。絵の知性というものが出来上がっていて、それを一生懸命学んでいる。でも、彼らの自分だけの絵、何も制約されない、描きたいというそのままの絵なんです。それにぼくらはびっくりする。いいとか悪いとかじゃなくて、そこで自分がやってきたことへの反省が生まれる」とお考えです。一方、入江氏は、「自分たちは画集や美術館など、絵があるのがあたりまえの環境で、生きてきました。それは恵まれたことであると同時に、不幸とも言えるかもしれない。彼らは純粹に描きたいという気持ちと、描く行為がつながっているように思います」と言い、我々はその純粹さに惹かれるのだと思うとお話されました。

今回の対談を通じて、我々はアール・ブリュットの作品を見ることによって、人はなぜ絵を描くのか、ということを知ることができると知りました。同時に大学で何を学ぶべきか、ということを考えるきっかけももらうことができたのではない

でしょうか。

「まず、できることは、彼らの作品のすばらしさを知ること」という入江氏の言葉に、これからも関心をもって積極的にかかわっていく必要性を感じました。



学生からの感想

■大学で「学ぼう」と思って気負っていたが、自分をひとつでも表現できる物を残せたら良いと思いました。

■絵を描きたいと思ったら描く、その自分の絵に対しての情熱を持ち続ける、持続することが大切だと感じた。思いのままに。障がいなんて関係ない、描きたいと思えば描けばいい。

自分のやりたいことを思いのままにやって続けようと思った。

■私が初めて障がい者の絵を見た時の感想は、怖いということだったが、今回の対談を聞いて、なぜ怖いと思ったのかが少し分かった気がした。人間の中から出てくる情熱を、俗物などに邪魔されずに純粹に表現しているからだと思う。

■スライドショーでたくさん作品を見せていただいて、自分には思いつかないような面白さや面白さもありました。写真も大事だと思うけど、情熱を持って表現したい物を表現していくことも大事だと知りました。ありがとうございました。

■障がい者、普通の人間と分けるのは悲しい。形式にとらわれない芸術。芸術に対する情熱、人間の魂に近い芸術のことを忘れてはいけないと思った。

■こういった機会というか、この授業がないと、知的障がい者の描く絵を見る機会や、それについての考え等は決して、私の生涯の中で生まれることはなかったと思います。

■悲しかった。その内容は、まずその人たち（障がい者）が本当に絵を描くことを望んでいるのか、又、その絵を描いて、周囲が面白いとかいっているのはどうなのかなと思う。確かに色、描いているものも私たちには、描くことのできないようだと思うが、それに近づくことができるのは才能だと片付けてほしくない。才能が1%で努力が99%だって、その人がその人なりに描きたいと思って描いたならそれでいいと思う。

■ありのままの絵を描くにはどうしたらいいのかと思った。

■今まで生きていて絵という存在はずっとそばにありましたが、「絵」とは何か、いつ描かれたのか、なぜ私たちは絵を描いているのかと絵について深く考えたことがなかったことに気がつきました。

■私の兄は自閉症であり昔はよく絵を描いていましたが、普段何も語らない兄が描いていた、ということの意味をもう一度考え直してみたいと思った。

Topics ● 4

杉並区議会×メディアアート学科学生 杉並区議会ポスター制作

杉並区からの依頼により本年からメディアアート学科の学生が杉並区議会ポスターを制作しています。今までの常識にとられない斬新なヴィジュアルで、区民の区議会に対する関心の喚起と傍聴への来場促進を目的としています。メディアアート学科4年生の長岡真子さん、藤原ゆかりさん、本田浩子さんがチームとなり、毎回共同でアイデアを練り、提案から写真撮影、制作、入稿までを一貫して行っています。好評につき現在までに4作品作成しています。



右より長岡真子さん、藤原ゆかりさん、小泉やすお杉並区議会議長、本田浩子さん、川村貞知准教授



「Make! Suginami」篇



「のぞいてみませんか?」篇

(アート・デザイン表現学科メディア表現領域准教授 川村貞知)

NEWS ● 4 ツイッターサイト「21世紀のヴィーナス宣言!」開設



<http://www.joshibi110th.net/venus>

このたび創立110周年を記念して、在学生と卒業生のためのツイッターサイト「21世紀のヴィーナス宣言!」を立ち上げました。在学生と卒業生に5つのテーマについて簡単にコメントを投稿していただくサイトです。「女子美の思い出」、「女子美のここが好き」、「10年後の夢に花を咲かせよう」といったテーマの他、「活躍中継!!」には企画やイベント開催のお知らせなどを

投稿してご自分の活動の告知に使っていただけます。「あつまれ女子美生井戸端会議」にはおしゃべり感覚で好きなことを投稿できます。サイトの一番の目的は、この110周年の機会に、在学生と卒業生にツイッターを通してつながってもらえることです。ぜひアクセスして、投稿してみてください。そして興味を持った在学生・卒業生のツイッターをフォローしてみてください。

NEWS ● 5 女子美生の絵本が書籍化されました



芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコース4年 加藤祐子さんが制作した絵本「シチューをもらったかえりみち」が書籍化されました。この作品は、2009年、もったいない図書館(福島県東白川郡矢祭町)で行われた手づくり絵本コンクールの一般の部で最優秀賞に輝いたもので、主人公の少年がおばあちゃんからシチューをもらった帰り道、さまざまな動物たちと出会い、最後にはみんなで食卓を囲むという心

温まる物語です。作者の加藤さんが「大切な人とおいしいものを食べる幸せを表現した」というこの作品は、主人公や登場する動物たちが表情豊かに描かれており、読者を優しい気持ちにさせる作品です。

この度、コンクールを主催した矢祭町「子ども読書の街づくり実行委員会」から出版され、絵本文化の全国発信のため全国の図書館と美術系大学、福島県内図書館に寄贈されました。

Topics ● 5 女子美生がヲタ芸を踊るワークショップを主催



5月30日、山下由貴さん(大学院美術研究科修士課程洋画1年)が東京都千代田区のArtChiyoda 3331で「女子美×女子

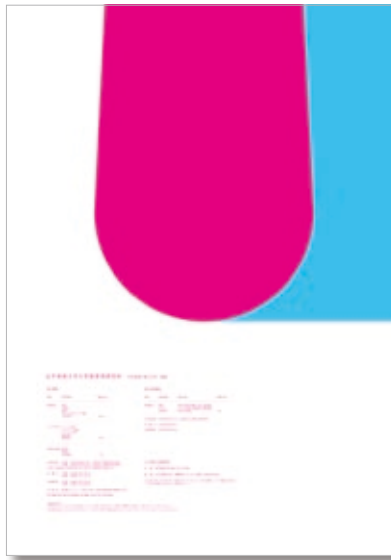
高生 体育の時間」というワークショップを主催しました。このワークショップは、アイドルを応援するためにファンが踊る独特な踊り「ヲタ芸」を来場者と一緒に踊るといふもの。東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことによって新たな文化を創造・発信する、東京都の文化事業「東京アートポイント計画」のアートプログラムのひとつ、劇作家の岸井大輔氏が展開する「東京の条件」の「総会」と呼ばれる集会の中で実施されました。

ワークショップを主催した山下由貴さんは、これまで秋葉原の人々との交流や体験を元に、作品制作を行ってきました。今回、「ヲタ芸」を教え、一緒に踊ることで日頃関わり合うことのない人々が交流し、一つのものをつくりあげる喜びを感じられるのではと思ひ企画。当日は大盛況に終わりました。この企画をきっかけに、様々な人と関わり合いながら自分らしくいられる表現方法、世界観を更に追求していこうという山下さんの今後の活躍が期待されます。

NEWS ● 6 林規章教授 ADC賞を受賞&現代日本のポスター100に選出



「ブルーノ・ムナリーの本たち」



女子美術大学大学院学生募集ポスター

デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻 林規章教授が、『ブルーノ・ムナリーの本たち』（ビー・エヌ・エヌ新社発行）の装丁デザインで、ADC賞を受賞しました。ADC賞はこの1年間に発表された、あらゆるジャンルのグラフィックデザインと応募作品、約1万点のなかから、東京アートディレクターズクラブが10作品を選出するもので、日本の広告やグラフィックデザインの動向を反映する権威ある賞として毎年内外から注目を集めています。

また、林教授のデザインした女子美術大学大学院学生募集ポスターが、JAGDA（社団法人日本グラフィックデザイナー協会）の選出する現代日本のポスター100に選出されました。作品は、イタリアのヴェネチアにて開催される現代日本のポスター100展で展示されます。

NEWS ● 7 村田朋泰准教授 SKIPシティ国際Dシネマ祭で奨励賞を受賞

7月23日から10日間をわたり、埼玉県川口市で開催されたSKIPシティ国際Dシネマ映画祭2010にて、デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻 村田朋泰准教授の監督作品「家族デッキ」が短編部門（国内コンペティション）で奨励賞を受賞しました。

受賞作品：家族デッキ Family Deck
東京の下町にある床屋。床屋を営む高田家は、両親と、中学生のお姉さん、小学生の弟の4人家

族。この床屋に住まう七福神（髪様）のいたずらで、高田家の日常には、ちょっと不思議な出来事が起こります。あたかも本当の人生のように、一本筋では語れない。さまざまな出来事の断片を折り重ねて、ひとつの家族の姿を描いた作品です。

村田朋泰准教授からコメント

荒川区を通る明治通り沿いに古い理髪店がありました。僕はその建物すべてをミニチュア化して僕の目の前にもう一つの世界を現出させたいと思いました。それを舞台に「家族」について考えてみたいと。三年前に取材させてもらったその理髪店は今はもうありません。ミニチュア化された理髪店だけが僕の目の前にあるだけです。



個展のお知らせ 村田朋泰「スライジング」

- 会期：2010年10月2日（土）～10月31日（日）
12:00-20:00
- 会場：NADiff Gallery
東京都渋谷区恵比寿1-18-4 1F

Topics ● 6 第11回 美術教育フォーラム開催

今年で第11回目を迎えた「美術教育フォーラム」は、8月4日に「美術館と学校・地域社会とが連携した美術教育」というテーマで、国立オリンピック記念青少年総合センター セミナーホールにて開催されました。小・中・高等学校の図画工作・美術科担当の教員や教員志望者および美術館関係者など183名の参加がありました。

主催者代表として小倉芸術学部長の挨拶があった後、第1部は世田谷美術館学芸員高橋直裕氏より、「美術館と学校 世田谷美術館の実践から」と題した基調講演が行われました。午後からの第2部では、パネリストとして美術館と学校とが連携した美術教育を研究・実践されている方々をお招きし、今回のテーマに即した事例発表があり

ました。続いて各パネリストのコメント、補足説明などが行われ盛況のうちに閉会しました。なお引き続き、講師、パネリストを囲んだ情報交換会が行われました。

- 基調講演講師
高橋直裕（世田谷美術館学芸部教育普及課 学芸員）
- パネルディスカッション
パネリスト
降旗千賀子（目黒区美術館 学芸員）
山口百合（東京国立近代美術館 研究補佐員）
濱口由美（福井大学教育地域科学部）
江原真美子（東京都港区立港南小学校 教諭）
梅田亜由美（女子美術大学美術館 学芸員）
- コメントーター
高橋直裕（世田谷美術館学芸部教育普及課 学芸員）
- コーディネーター
前田基成（女子美術大学 教授）
- 後援 東京都教育委員会
- 参加者183名の内訳
小学校教諭19名、中学校教諭59名、高校教諭19名、特別支援学校教諭4名、大学生21名、本学教職員20名、その他（美術館関係者含む）41名



「たんねのあかり2010」イベント 「たんねワークショップ2010」を実施



昨夏、デザイン学科非常勤講師下田氏が主催、デザイン学科学生が運営に携わり、新潟県柏崎市谷根（たんね）にて実施された「あかり」と「そこにあるもの」をテーマにしたアートイベント「たんねのあかり」が地域内外から好評を博し、地域との連携体制を強化しつつ、本年度より（財）新潟県文化振興財団助成事業（地域文化創造事業）として3ヵ年継続実施されることとなりました。

この度、秋に行われる「たんねのあかり

2010」のイベントとして8月7日に「たんねワークショップ2010」を実施。運営に携わった学生は8月6日～8日まで谷根に滞在し、地元の方々や子供たちと交流をはかりながら今秋の「たんねのあかり」イベントに向けてサイトサーベイなどを行いました。

ワークショップ当日には新潟総合テレビや地元新聞各社から学生にインタビューが決定され、学生らはそれぞれの想いを改めて言葉として伝えるという学びの機会も得ることができました。ワークショップの参加者は約50名。夜のミニレクチャーでは約20名の県内地域視察チームも飛び入りで参加し、町内会長による「谷根の話」、講師による「たんねの色・橋・そこにあるもの」の話や学生からの意見発表を聴講しました。また、「谷根産こしひかり」のラベルデザインを学生が担当することとなり、イベントでの販売を目指しています。

「たんねワークショップ2010」スタッフ
デザイン・工芸学科 学生

3年：遠藤真美子・千田智子・村澤有美

4年：嶋田樹奈・野田桐子・細野有香

卒業生：池田麻美（2006年短大卒）

非常勤講師：下田倫子、他1名

ーイベント運営学生サポーター募集ー

「たんねのあかり2010」は10月16日（土）に開催されます。秋の稲刈り後の棚田と川の景観を「あかり」と「そこにあるもの」で彩ります。イベントへ参加希望の女子美生はご連絡ください。

◆ブログ：<http://tanne2010.jugem.jp/>

◆問い合わせ：tannenoakari@gmail.com



ワークショップ 竹を用いた作品制作

Topics ● 8 表紙の作家紹介 一大小島 真木さんー

今号の表紙の作品は、昨年、トーキョーワンダーウォール2009公募にてトーキョーワンダーウォール賞を受賞し、7月3日から25日にトーキョーワンダーサイト本郷にて個展が行われた大小島真木さん（芸術学部絵画学科洋画専攻2009年卒・現在本学大学院洋画研究領域2年）の「オレンジ色の月とみずいろの太陽」という作品の一部です。

今後ますますの活躍が期待される大小島さんに作品についてお伺いしました。

ー作品制作におけるご自身のスタンスや考え方を教えてください。

私は自分の思想を作品の中に「物語り」として織り込みます。この間まで作っていたものの中に、一つのものがあるんなものに変化するという場面が登場します。現実に親から子どもが生まれ、その子どもは成長し自分が親となってまた子どもを産む。私たちの目には見ることもできない小さな元素が、私たちの身体を含めた生物を造るし、海や太陽、宇宙をも造るんですね。ある時には、そうした変化の性質自体を物語りとして作品にします。また、「小さなものが集まって自分が作られる」というシーンでは、そこで作られているものとは自分の身体のことであり、また宇宙のことでもあります。人が感覚的に知っていることを、実感とし

て「はっ」と思わせることができたらいいなと思っています。あるいは実感しか持てないことを、感覚としてもう一度触れなおしてもらおうということにも興味があります。ー複数枚の作品によって独特の世界を構成していますが。

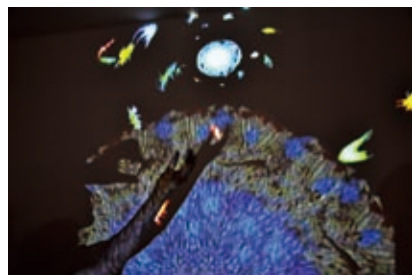
私は普段からどこか違う場所にいる目線で現実を見てしまったりする 때가あって、そういう感覚時に流れる時間ってすごくおもしろいんですよ。今ここにいる自分を飛び越えて、大気や小さな虫からも視点ももらうような感じで。いくつかの視点を持って物事を見たり考えたりすることは、実際に重要なことだなと思いますし。なので、そういう意図の作品を作る上で物語りという媒体は自分にとってちょうどいいんです。複数枚描くことで、描きたい時間の流れを描けるのがとても好きです。ある時は深い森の池を覗き、またある時は海の底をゆっくりと歩く、そういった感覚を描きます。

ー表紙の作品はどんな物語なのですか。

これは「自然を感じる」/「I feel nature」という作品です。風に乗って運ばれていく種から、自然を感じるができる。また自然を感じるができれば、その中で自分を捉えることができるよ。という前後が、この作品にあったりします。



“The world is confused.” 世界が混乱する



“astronomical forest” 宇宙の森 映像/moving image



トーキョーワンダーサイト本郷での個展風景



発行 学校法人女子美術大学

〒166-8508

東京都杉並区和田1-49-8

企画・編集 企画部 広報人試課

制作・印刷 株式会社日福印刷

監修 山本 吉男

発行日 2010年9月23日

広報人試課では女子美のニーズを募集しています。
お気軽に左記までお知らせください。また、本誌の
定期購読をご希望の方は必ず先広報人試課まで
ご連絡ください。

《広報人試課》TEL. 042-778-6123

E-mail: prs@venus.joshibi.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>